

# 有価証券報告書

第73期

自 平成28年4月1日  
至 平成29年3月31日

積水化成品工業株式会社

E00845

# 目 次

頁

表紙

第一部 企業情報 .....	1
第1 企業の概況 .....	1
1. 主要な経営指標等の推移 .....	1
2. 沿革 .....	3
3. 事業の内容 .....	4
4. 関係会社の状況 .....	5
5. 従業員の状況 .....	7
第2 事業の状況 .....	7
1. 業績等の概要 .....	7
2. 生産、受注及び販売の状況 .....	9
3. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等 .....	10
4. 事業等のリスク .....	11
5. 経営上の重要な契約等 .....	12
6. 研究開発活動 .....	12
7. 財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 .....	13
第3 設備の状況 .....	14
1. 設備投資等の概要 .....	14
2. 主要な設備の状況 .....	14
3. 設備の新設、除却等の計画 .....	14
第4 提出会社の状況 .....	15
1. 株式等の状況 .....	15
2. 自己株式の取得等の状況 .....	18
3. 配当政策 .....	19
4. 株価の推移 .....	19
5. 役員の状況 .....	20
6. コーポレート・ガバナンスの状況等 .....	22
第5 経理の状況 .....	32
1. 連結財務諸表等 .....	33
2. 財務諸表等 .....	60
第6 提出会社の株式事務の概要 .....	70
第7 提出会社の参考情報 .....	70
1. 提出会社の親会社等の情報 .....	70
2. その他の参考情報 .....	70
第二部 提出会社の保証会社等の情報 .....	70

[監査報告書]

## 【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成29年6月26日
【事業年度】	第73期（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）
【会社名】	積水化成工業株式会社
【英訳名】	Sekisui Plastics Co.,Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 柏原 正人
【本店の所在の場所】	大阪市北区西天満2丁目4番4号
【電話番号】	大阪06（6365）3014番
【事務連絡者氏名】	管理本部経理部長 草竹 俊一
【最寄りの連絡場所】	東京都新宿区西新宿2丁目7番1号
【電話番号】	東京03（3347）9615番
【事務連絡者氏名】	経営戦略本部コーポレート企画センター経営企画部長 藤原 敬彦
【縦覧に供する場所】	積水化成工業株式会社東京本部※ （東京都新宿区西新宿2丁目7番1号） 株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

（注） ※は金融商品取引法の規定による縦覧に供すべき場所ではないが、株主等の縦覧の便宜のために備えるものである。

## 第一部【企業情報】

### 第1【企業の概況】

#### 1【主要な経営指標等の推移】

##### (1) 連結経営指標等

回次	第69期	第70期	第71期	第72期	第73期
決算年月	平成25年3月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月
売上高 (百万円)	101,784	109,923	113,660	101,559	102,398
経常利益 (百万円)	1,237	2,206	4,180	4,862	5,049
親会社株主に帰属する 当期純利益 (百万円)	926	1,264	2,530	3,147	3,404
包括利益 (百万円)	2,326	2,764	6,095	1,510	4,559
純資産額 (百万円)	50,929	54,036	58,275	58,800	61,363
総資産額 (百万円)	105,562	110,687	116,201	114,892	119,670
1株当たり純資産額 (円)	1,063.69	1,136.53	1,231.37	1,243.30	1,322.14
1株当たり当期純利益金額 (円)	19.72	26.95	54.14	67.33	73.03
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益金額 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	47.4	48.0	49.5	50.6	50.7
自己資本利益率 (%)	1.9	2.5	4.6	5.4	5.7
株価収益率 (倍)	25.1	20.5	16.3	10.1	10.7
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	5,091	3,239	6,216	7,521	7,421
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△6,344	△2,369	△5,058	△4,766	△5,505
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	791	△1,488	△681	△2,332	△2,953
現金及び現金同等物の 期末残高 (百万円)	6,562	6,278	7,030	7,137	6,266
従業員数 (人) [外、平均臨時雇用者数]	1,813 [635]	1,833 [653]	1,859 [666]	1,895 [709]	2,011 [689]

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれていない。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していない。

3. 当社グループの業績をより適切に開示・管理するために、第71期より大半の国外連結子会社の会計年度終了日を12月31日から連結会計年度と同じ3月31日に変更した。これに伴い第71期の当該子会社の業績は、平成26年1月1日から平成27年3月31日までの15カ月間の業績を反映している。

4. 平成28年10月1日を効力発生日として当社普通株式2株につき1株の割合で株式併合を実施した。第69期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額を算定している。

## (2) 提出会社の経営指標等

回次	第69期	第70期	第71期	第72期	第73期
決算年月	平成25年 3 月	平成26年 3 月	平成27年 3 月	平成28年 3 月	平成29年 3 月
売上高 (百万円)	76,439	79,033	78,502	71,629	70,169
経常利益 (百万円)	731	1,961	3,194	3,939	4,338
当期純利益 (百万円)	433	1,335	2,089	2,772	3,107
資本金 (百万円)	16,533	16,533	16,533	16,533	16,533
発行済株式総数 (千株)	95,976	95,976	95,976	95,976	46,988
純資産額 (百万円)	47,799	48,872	51,676	53,566	56,013
総資産額 (百万円)	97,816	100,381	102,934	103,723	106,292
1株当たり純資産額 (円)	1,016.61	1,045.01	1,105.01	1,145.48	1,220.67
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間 配当額) (円)	4.00 (0.00)	7.00 (3.00)	9.00 (3.50)	12.00 (5.00)	18.00 (6.00)
1株当たり当期純利益金額 (円)	9.22	28.45	44.68	59.29	66.61
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益金額 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	48.9	48.7	50.2	51.6	52.7
自己資本利益率 (%)	0.9	2.7	4.2	5.3	5.7
株価収益率 (倍)	53.6	19.4	19.7	11.5	11.7
配当性向 (%)	86.8	49.2	40.3	40.5	36.0
従業員数 (人) [外、平均臨時雇用者数]	486 [40]	456 [34]	444 [34]	424 [41]	417 [42]

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれていない。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していない。

3. 提出会社の第71期の1株当たり配当額9円は、創立55周年記念配当50銭を含んでいる。

4. 提出会社の第72期の1株当たり配当額12円は、最高益更新の記念配当2円を含んでいる。

5. 平成28年10月1日を効力発生日として当社普通株式2株につき1株の割合で株式併合を実施した。第69期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額を算定している。

6. 平成28年10月1日を効力発生日として当社普通株式2株につき1株の割合で株式併合を実施した。第73期の1株当たり配当額18円は、中間配当額6円と期末配当額12円の合計としている。なお、当該株式併合を踏まえて換算した場合、中間配当額は12円となるため、期末配当額12円を加えた年間配当額は1株当たり24円となる。

## 2 【沿革】

提出会社は、昭和34年10月発泡プラスチックの総合経営を目的として、積水スポンジ工業株式会社（以下旧積水スポンジ工業株式会社という）の商号をもって設立された会社であるが、株式の額面変更のため、昭和23年11月20日設立の文化企業株式会社を、昭和38年3月積水スポンジ工業株式会社と改称して昭和38年6月同社に吸収合併された。

以上のように株式の額面変更を目的とした合併であるから、実質上の存続会社は、旧積水スポンジ工業株式会社であるため、同社及びその子会社についての沿革を以下に記述する。

昭和34年10月	会社設立、本店を大阪市北区宗是町1番地に設置したが、本社事務所及び奈良工場は奈良市南京終町に設け発泡性ポリスチレンビーズ及び塩ビ発泡事業に着手
昭和35年4月	発泡性ポリスチレンビーズの製造、販売を開始
昭和36年2月	東京営業所を東京都港区に設置（現、東京本部：東京都新宿区西新宿2丁目7番1号）
昭和36年9月	茨城県古河市に関東工場設置
昭和36年10月	本社事務所を大阪市北区堂島浜通に移転（現、本社：大阪市北区西天満2丁目4番4号）
昭和37年7月	発泡ポリスチレンシートの製造、販売を開始
昭和38年6月	積水スポンジ工業株式会社（旧商号：文化企業株式会社）に吸収合併
昭和38年8月	発泡ポリウレタンフォームの販売を開始
昭和39年9月	大阪証券取引所市場第2部に上場
昭和41年11月	奈良県天理市に天理工場設置、発泡ポリスチレンシートの製造を開始
昭和43年8月	発泡ポリエチレンフォームの製造、販売を開始（関東工場及び天理工場）
昭和44年10月	積水化成成品工業株式会社に商号変更、本店を奈良市に移転（但し、本社事務所は大阪市に設置）
	滋賀県甲賀市に滋賀工場設置、発泡性ポリスチレンビーズの製造を開始
昭和48年4月	東京証券取引所市場第2部に上場
昭和51年7月	北海道エスレン株式会社（現、連結子会社）を設立（平成15年4月に株式会社積水化成成品北海道に商号変更）
昭和53年4月	大分県中津市に大分工場設置、発泡ポリスチレンシートの製造を開始
昭和53年9月	東京・大阪両証券取引所市場第1部に指定
昭和56年4月	茨城県猿島郡境町に境工場設置、押出發泡ポリスチレンボードの製造を開始（平成22年3月押出發泡ポリスチレンボード事業を譲渡）
平成元年9月	岡山県笠岡市に岡山工場設置、発泡ポリスチレンシートの製造を開始
平成5年4月	原聚化学工業股份有限公司（現、連結子会社）に資本参加（平成21年4月に台湾積水原聚股份有限公司に商号変更、平成26年10月に台湾積水化成成品股份有限公司に商号変更）
平成6年4月	茨城県筑西市に茨城下館工場設置、発泡ポリスチレンシートの製造を開始
平成6年12月	技研化成株式会社（現、連結子会社）を買収（平成23年7月に株式会社積水技研に商号変更）
平成7年7月	本店を本社事務所（大阪市北区西天満2丁目4番4号）に移転
平成7年8月	奈良市による土地収用により奈良工場を閉鎖
平成16年6月	天津積水化成成品有限公司（現、連結子会社）を設立
平成18年1月	Sekisui Plastics U.S.A., Inc.（現、連結子会社）を設立
平成19年6月	Sekisui Plastics Europe B.V.（現、連結子会社）を設立
平成19年12月	積水化成成品（蘇州）科技有限公司（現、連結子会社）を設立
平成24年3月	Sekisui Plastics (Thailand) Co., Ltd.（現、連結子会社）を設立
平成24年4月	各工場を廃止し、それぞれその業務を、当社の連結子会社である株式会社積水化成成品関東、株式会社積水化成成品滋賀、株式会社積水化成成品天理、株式会社積水化成成品九州に移管
平成24年7月	PT. Sekisui Plastics Indonesia（現、連結子会社）を設立
平成25年7月	東京証券取引所と大阪証券取引所の現物市場の統合により、東京証券取引所市場第1部への単独上場となる。
平成27年1月	積水化成成品（上海）精密塑料有限公司（現、連結子会社）を設立
平成27年4月	Sekisui Plastics Mexico S.A. de C.V.（現、連結子会社）を設立

### 3 【事業の内容】

当社の企業集団は、国内連結子会社19社、国外連結子会社13社、国内持分法適用会社1社、国外非連結子会社3社、国内関連会社4社、国外関連会社2社、国内その他の関係会社1社及び当社を含めて合計44社から構成されており、素材製品として発泡プラスチックの樹脂、シートの製造から最終商品の製造、販売までを一貫した事業として行っている。あわせて、これらに付随する事業活動も展開している。

事業内容及び当社と関係会社の当該事業に係る位置付け並びにセグメントとの関連は、次のとおりである。

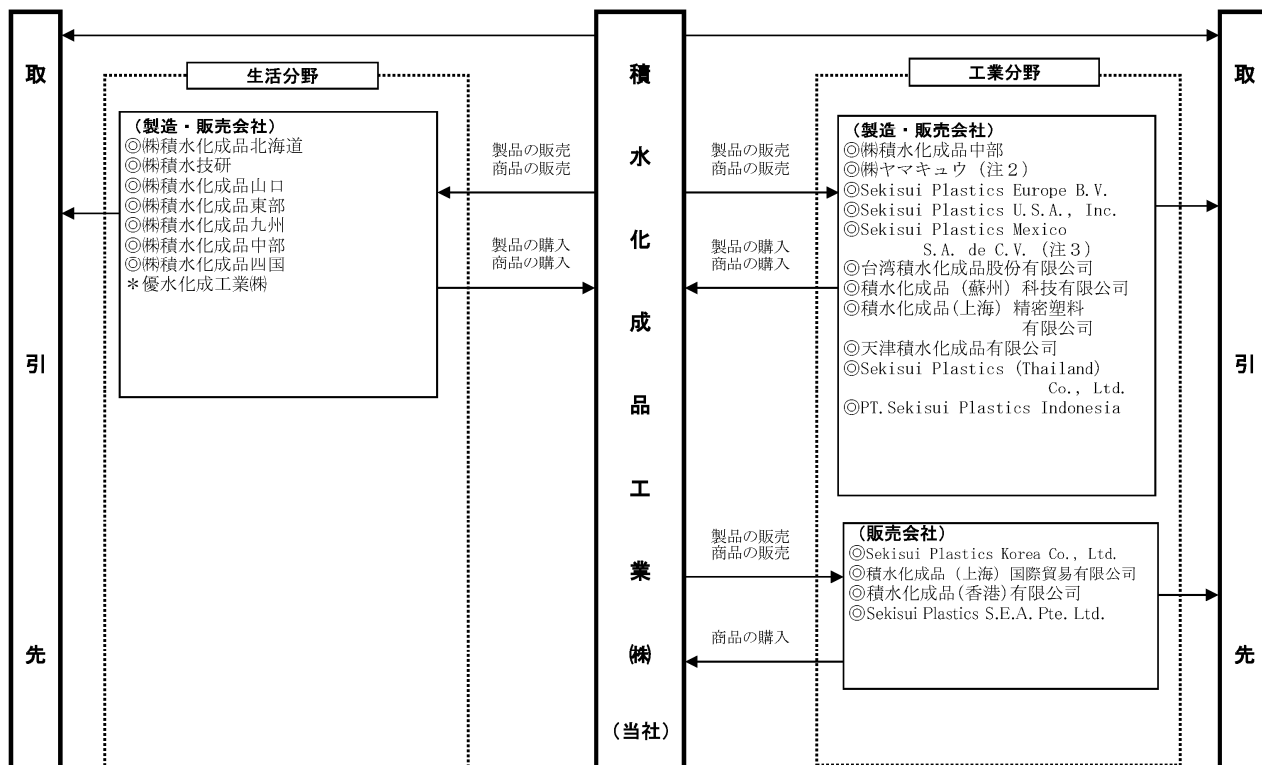
また、次の2区分は「第5 経理の状況 1. 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一である。

市場・用途	主要な製品・商品	主要な会社
生活分野		
農水産資材 食品包装材 流通資材 建築資材 土木資材	エスレンビーズ エスレンシート エスレンウッド インターフォーム これら成形加工品 ESダンマット エスレンブロックなど	(製造・販売会社) 当社 ㈱積水化成成品北海道 ㈱積水技研 ㈱積水化成成品山口 ㈱積水化成成品東部 ㈱積水化成成品九州 ㈱積水化成成品中部 ㈱積水化成成品四国 優水化成工業㈱
工業分野		
自動車部材 車輛部品梱包材 産業部材 産業包装材 電子部品材料 医療・健康用材料	ピオセララン ライトロン ネオマイクロレン セルペット テクポリマー テクノゲル フォーマック STレイヤー エラストイル これら成形加工品など	(製造・販売会社) 当社 ㈱積水化成成品中部 ㈱ヤマキユウ (注1) Sekisui Plastics Europe B.V. Sekisui Plastics U.S.A., Inc. Sekisui Plastics Mexico S.A. de C.V. (注2) 台湾積水化成成品股份有限公司 積水化成成品 (蘇州) 科技有限公司 積水化成成品 (上海) 精密塑料有限公司 天津積水化成成品有限公司 Sekisui Plastics (Thailand) Co., Ltd. PT.Sekisui Plastics Indonesia (販売会社) Sekisui Plastics Korea Co., Ltd. 積水化成成品 (上海) 国際貿易有限公司 積水化成成品 (香港) 有限公司 Sekisui Plastics S. E. A. Pte. Ltd.

(注) 1. 当社は、平成28年10月に株式会社ヤマキユウの発行済株式の85.5%を取得し連結子会社としたので、当連結会計年度より同社を主要な子会社に加えている。

2. 当連結会計年度より、Sekisui Plastics Mexico S.A. de C.V.を主要な子会社としている。

各事業に係る当社及び主要な関係会社の主要な関係を事業系統図によって示すと次のとおりである。



- (注) 1. 各社名の前に連結子会社は「◎」、持分法適用関連会社は「\*」をそれぞれ表示している。  
 2. 当社は、平成28年10月に株式会社ヤマキユウの発行済株式の85.5%を取得し連結子会社としたので、当連結会計年度より同社を主要な子会社に加えている。  
 3. 当連結会計年度より、Sekisui Plastics Mexico S.A. de C.V.を主要な子会社としている。

#### 4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な 事業の 内容	議決権の 所有(又 は被所 有)割合 (%)	関係内容
(連結子会社) 積水化学成品北海道	北海道 千歳市	100	生活分野	100	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：有 役員の兼任等：有
積水化学技研	兵庫県 伊丹市	100	生活分野	100	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：有 役員の兼任等：有
積水化学成品山口	山口県 防府市	100	生活分野	100	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：有 役員の兼任等：有
積水化学成品東部	茨城県 境町	90	生活分野	100	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：有 役員の兼任等：有
積水化学成品九州	大分県 中津市	80	生活分野	100	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：有 役員の兼任等：有
積水化学成品中部	名古屋市 中区	70	生活分野 工業分野	100	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：有 役員の兼任等：有
積水化学成品(注5)	東京都 立川市	55	工業分野	85.5	同社製品を当社が商品として購入している。 資金の貸付：有 役員の兼任等：有



名称	住所	資本金 (百万円)	主要な 事業の 内容	議決権の 所有（又 は被所有）割合 (%)	関係内容
㈱積水化成成品四国	愛媛県 大洲市	50	生活分野	100	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：有 役員の兼任等：有
Sekisui Plastics Europe B.V.	オランダ	千ユーロ 6,500	工業分野	100	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：有 役員の兼任等：有
Sekisui Plastics U.S.A., Inc.	アメリカ	千US\$ 9,000	工業分野	100	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：有 役員の兼任等：有
Sekisui Plastics Mexico S.A. de C.V. (注6)	メキシコ	千MXN 100,000	工業分野	100	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：有 役員の兼任等：有
Sekisui Plastics Korea Co., Ltd.	韓国	千ウォン 125,000	工業分野	100	当社製品を同社が商品として購入している。 資金の貸付：無 役員の兼任等：有
台湾積水化成成品股份有限公司	台湾	千NT\$ 250,000	工業分野	100	同社製品を当社が商品として購入している。 資金の貸付：無 役員の兼任等：有
積水化成成品(蘇州)科技有限 公司	中国 蘇州市	千人民元 62,515	工業分野	100	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：有 役員の兼任等：有
積水化成成品(上海)精密塑 料有限公司(注7)	中国 上海市	千人民元 44,137	工業分野	100 (100)	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：無 役員の兼任等：有
天津積水化成成品有限公司	中国 天津市	千人民元 23,174	工業分野	100	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：無 役員の兼任等：有
積水化成成品(上海)国際貿 易有限公司	中国 上海市	千人民元 7,312	工業分野	100	当社製品を同社が商品として購入している。 資金の貸付：無 役員の兼任等：有
積水化成成品(香港)有限公 司	中国 香港	千HK\$ 1,000	工業分野	100	当社製品を同社が商品として購入している。 資金の貸付：無 役員の兼任等：有
Sekisui Plastics S.E.A. Pte.Ltd.	シンガポール	千US\$ 7,000	工業分野	100	当社製品を同社が商品として購入している。 資金の貸付：無 役員の兼任等：有
Sekisui Plastics (Thailand) Co., Ltd. (注7)	タイ	千THB 270,000	工業分野	100 (25)	資金の貸付：無 役員の兼任等：有
PT.Sekisui Plastics Indonesia(注7)	インドネシア	千IDR 56,834,100	工業分野	100 (25)	資金の貸付：有 役員の兼任等：有
その他 11社					
(持分法適用関連会社) 優水化成工業㈱	石川県 金沢市	90	生活分野	33.3	当社製品を同社が原材料として購入している。 資金の貸付：無 役員の兼任等：有
(その他の関係会社) 積水化学工業㈱ (注3. 4)	大阪市 北区	100,002	工業分野	被所有 22.1 [0.3]	資金の貸付：無 役員の兼任等：有

- (注) 1. 主要な事業の内容欄には、セグメントの名称を記載している。  
2. 連結子会社のうち、特定子会社に該当するものはない。  
3. 有価証券報告書を提出している。  
4. 議決権の被所有割合の[ ]内は、間接被所有割合の内数である。

5. 当社は、平成28年10月に株式会社ヤマキユウの発行済株式の85.5%を取得し連結子会社としたので、当連結会計年度より同社を主要な子会社に加えている。
6. 当連結会計年度より、Sekisui Plastics Mexico S.A. de C.V.を主要な子会社としている。
7. 議決権の所有割合の（ ）内は、当社の連結子会社の所有割合の内数である。

## 5【従業員の状況】

### (1) 連結会社の状況

平成29年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数（人）	
生活分野	1,057	(450)
工業分野	786	(211)
全社（共通）	168	(28)
合計	2,011	(689)

(注) 従業員数は就業人員（当社グループからグループ外への出向者を除き、グループ外から当社グループへの出向者を含む）であり、臨時従業員数は（ ）内に当連結会計年度の平均人員を外数で記載している。なお、臨時従業員には、パートタイマー及び嘱託契約の従業員を含み、派遣社員を除いている。

### (2) 提出会社の状況

平成29年3月31日現在

従業員数（人）	平均年齢（歳）	平均勤続年数（年）	平均年間給与（千円）
417 (42)	42.8	17.7	7,012

セグメントの名称	従業員数（人）	
生活分野	93	(5)
工業分野	156	(9)
全社（共通）	168	(28)
合計	417	(42)

(注) 1. 従業員数は就業人員であり、当社から社外への出向者111名を除き、社外から当社への出向者8名を含んでいる。臨時従業員数は（ ）内に当事業年度の平均人員を外数で記載している。なお、臨時従業員には、パートタイマー及び嘱託契約の従業員を含み、派遣社員を除いている。

2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでいる。

### (3) 労働組合の状況

当社には労働組合はなく、労使協調の機関として社業推進会が組織されている。

また、連結会社においては1社のみ労働組合が組織されており、その他の会社については労働組合はない。

なお、労使関係については特に記載すべき事項はない。

## 第2【事業の状況】

### 1【業績等の概要】

#### (1) 業績

当連結会計年度の世界経済は、中国をはじめとする新興国の景気減速に加え、英国のEU離脱決定や米国の新政権への移行等を起因とする金融市場や為替の不安定な動き、さらには石油の中東減産合意による原油価格の上昇などによって、先行き不透明な状況が続いている。日本経済においては、景気は緩やかな回復基調にはあるものの、個人消費は停滞が続いた。日本の発泡プラスチック業界においては、原燃料価格は期後半から値上がり転じ、関連需要の盛り上がり欠く状況が続いた。

このような経営環境のなか、当社グループは平成28年度からの3カ年中期経営計画「Make Innovations 60」を策定し、「事業ポートフォリオ変革」と「収益構造革新」を進めるべく、施策を着実に推進している。

その結果、当連結会計年度の業績は、売上高は1,023億9千8百万円（前期比0.8%の増加）、営業利益は54億1百万円（前期比5.5%の増加）、経常利益は50億4千9百万円（前期比3.9%の増加）、親会社株主に帰属する当期純利益は34億4百万円（前期比8.2%の増加）と増収増益になり、営業利益および親会社株主に帰属する当期純利益は過去最高益となった。

以下、各セグメントの業績は次のとおりである。

#### ①生活分野

農産・水産関連は震災や天候不順の影響もあり、低調に推移した。一方、食品容器関連の需要は好調に推移し、建材・土木関連も安定的に推移した。主力製品である「エスレンビーズ」（発泡性ポリスチレンビーズ）や「エスレンシート」（発泡ポリスチレンシート）の売上数量は前期を上回ったが、売上金額は製品価格の改定により前期を下回った。

その結果、生活分野の売上高は622億3千3百万円（前期比3.6%の減少）、セグメント利益は38億2百万円（前期比6.3%の増加）となった。

#### ②工業分野

家電・IT関連では、「ピオセラン」（ポリスチレン・ポリオレフィン複合樹脂発泡体）などを用いた液晶パネル搬送資材用途において、台湾や中国での需要の回復が見られたが、日本国内は一部需要の停滞が続いた。「テクポリマー」（有機微粒子ポリマー）は、液晶パネルなどの光拡散用途において、顧客の需要が低調となった。自動車関連では、「ピオセラン」などを用いた部材用途で採用部位が拡大し、乗用車からバス・トラックなどの大型車への展開も加わって、大きく伸長した。

その結果、工業分野の売上高は401億6千5百万円（前期比8.6%の増加）、セグメント利益は19億6千9百万円（前期比12.9%の減少）となった。

グローバル展開については、当社グループでは、自動車、家電・ITなど工業分野を中心としてグローバルに事業拡大を推進している。中期経営計画「Make Innovations 60」では、これまでに拡大した生産・加工拠点の有効活用を推進していく。当連結会計年度の成果として、平成28年7月にオランダのピオセラン生産工場の能力を増強した。また、平成28年9月には、自動車、家電・IT関連などの需要に対応して、メキシコの発泡プラスチックの成形加工工場が稼働を開始した。

なお、当連結会計年度における国外売上高は170億5千4百万円（連結売上高に占める割合16.7%）となった。

CSRの取り組みについては、当社グループは、平成21年10月に策定した「積水化成成品グループ100年ビジョン」において、「人と環境を大切に 夢をふくらませる積水化成成品グループ」というCSR宣言を掲げ、地球環境を含むすべてのステークホルダーに対して社会的責任を果たし、グローバルに社会の持続的発展に貢献すべく取り組んでいる。

平成28年4月に発生した熊本地震においては、被災地自治体や派遣されていた自衛隊を通じて、支援物資や当社グループ商材の食品容器等を寄付することで被災者の方々に役立てていただいた。また、当社グループ員有志による災害募金運動を行い、その総額と会社からの拠出金を合わせて、被災者への義援金として日本赤十字社に寄託した。

環境貢献活動では、環境省が推奨している「グリーンカーテン活動」や「グリーンウェイブ」を継続的に推進している。

また、環境保護活動では、関西地域で「積水化成成品基金」助成団体と協働し里山保全活動と外来植物駆除活動を、関東地域でも新たに「積水化成成品基金」を開設し里山保全活動を継続的に行っている。

地域社会への貢献については、グループ各社において主に事業所周辺の清掃などの環境保護活動を実施している。

(2) キャッシュ・フロー

現金及び現金同等物（以下、「資金」という）の当連結会計年度末残高は、前期末に比べ8億7千万円減少し、62億6千6百万円となった。

<営業活動によるキャッシュ・フロー>

減価償却費の減少や法人税等の支払額の増加などにより、営業活動により得られた資金は、前期に比べ9千9百万円減少し、74億2千1百万円となった。

<投資活動によるキャッシュ・フロー>

有形固定資産の取得による支出の増加などにより、投資活動に使用された資金は、前期に比べ7億3千8百万円増加し、55億5百万円となった。

<財務活動によるキャッシュ・フロー>

自己株式の取得による支出の増加などにより、財務活動に使用された資金は、前期に比べ6億2千万円増加し、29億5千3百万円となった。

## 2 【生産、受注及び販売の状況】

(1) 生産実績

当連結会計年度の生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりである。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	前年同期比 (%)
生活分野 (百万円)	53,562	△5.5
工業分野 (百万円)	25,284	11.2
合計 (百万円)	78,847	△0.7

- (注) 1. 金額は、販売価格により表示しており、セグメント間の内部振替前の数値によっている。  
2. 上記の金額には、消費税等は含まれていない。

(2) 受注状況

主として見込生産を行っており、受注生産はほとんど行っていない。

(3) 販売実績

当連結会計年度の販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりである。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	前年同期比 (%)
生活分野 (百万円)	62,233	△3.6
工業分野 (百万円)	40,165	8.6
合計 (百万円)	102,398	0.8

- (注) 1. セグメント間の取引については相殺消去している。  
2. 最近2連結会計年度の主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は次のとおりである。

相手先	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)		当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	
	金額 (百万円)	割合 (%)	金額 (百万円)	割合 (%)
株式会社エフピコ	13,569	13.36	13,670	13.35

3. 上記の金額には、消費税等は含まれていない。

### 3 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中における将来に関する事項は当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものである。

#### (1) 会社の経営の方針

当社は平成21年10月1日に創立50周年を迎えた。これを機に、当社がグループとして今後の50年もさらに発展していくため、「積水化成成品グループ100年ビジョン」を策定、平成27年10月に策定から6年経過し、その間の事業環境の変化等を検証し一部を改訂した。

当社グループが創立100周年（平成71年）に目指す姿として、当社の創業の精神や新たな経営理念をベースに、「インダストリー」「ヒューマンライフ」「環境・エネルギー」の分野でグローバルに事業展開するとともに、「CSR」「全員経営」をグループ全体に展開し、「グローバルに顧客から信頼されるプラスチック・ソリューション・カンパニー」を目指していく。

#### (2) 中長期的な会社の経営戦略と目標とする経営指標

当社グループは「積水化成成品グループ100年ビジョン」に従い、創立60周年（平成31年）に向け、平成28年度からの3カ年中期経営計画「Make Innovations 60」を推進している。なお、「Make Innovations 60」はローリング計画として推進しているため、当初計画を一部変更している。

<コンセプト>

『100年ビジョンに沿って「事業ポートフォリオ変革」と「収益構造革新」を進める』

<重点施策>

- ・事業ポートフォリオの変革（事業領域・顧客拡大）
- ・ビジネスモデル変革のスピードアップ
- ・開発推進体制の変革による開発力強化
- ・高利益体質の構築に向けた競争力強化
- ・要員ポートフォリオ変革ならびに人材育成

経営指標としては、国外売上高の伸長に重点を置くとともに、売上高営業利益率や自己資本当期純利益率（ROE）の向上に努めていく。

「Make Innovations 60」の数値目標および経営指標目標は、次のとおりである。

連結目標	平成28年度 実績	平成29年度 計画	平成30年度 計画
売上高	1,024億円	1,120億円	1,240億円
（うち国外売上高）	（171億円）	（192億円）	（235億円）
（国外売上高比率）	（16.7%）	（17.1%）	（19.0%）
営業利益	54億円	58億円	77億円
（売上高営業利益率）	（5.3%）	（5.2%）	（6.2%）
経常利益	50億円	57億円	76億円
親会社株主に帰属する当期純利益	34億円	38億円	50億円
（自己資本当期純利益率）	（5.7%）	（6.1%）	（7.8%）

※ 億円未満は四捨五入で表示している。

#### (3) 対処すべき課題

今後の見通しについては、中国など新興国の経済動向に対する懸念、米国新政権の政策動向や、英国のEU離脱決定による影響などにより、当社を取り巻く環境は不透明な状況が続くことが予想される。

当社グループでは、中期経営計画「Make Innovations 60」の2年目を迎え、「事業ポートフォリオ変革」と「収益構造革新」を進めるべく、施策を着実に実行していく。

具体的には、グローバルを中心に工業分野を伸ばし、事業ポートフォリオの変革を進める。グローバル事業については、早期に収益貢献に結びつくよう事業展開施策を再構築する。「STレイヤー」（炭素繊維強化プラスチック複合発泡成形体）や「エラストイル」（熱可塑性エラストマービーズ発泡体）など新製品開発については、上市や拡販のスピードアップをはかる。

また、原材料価格の変動に対応した適切な製品価格の改定を行うとともに、高利益体質の構築に向け、生産性向上や物流費削減などグループ全体のコストダウンに引き続き取り組んでいく。

#### 4 【事業等のリスク】

以下において、当社グループの事業展開上のリスク要因となる可能性があると考えられ、また投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性があると考えられる主な事項を記載している。当社グループはこれらのリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避、発生した場合の対応に努める方針である。

なお、文中における将来に関する事項は当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものである。

##### (1) 経済状況、競合について

当社グループは、市場における経済状況、需要家や個人消費の動向に影響を受けないよう販売力、開発力、財政体質の強化に努めている。しかし、景気動向による需要の縮小、他社との競合による需給バランスや価格の変動によって、当社グループの業績及び財政状況に影響を与える可能性がある。

##### (2) 原材料の市況変動について

当社グループの資材調達活動は、原材料、荷造材料、製造設備等の有利購買に注力している。当社グループで使用する主な原材料は、スチレンモノマー、ポリスチレン等であり、それら原材料の価格変動をタイムリーに製品価格に転嫁できなかった場合、当社グループの業績及び財政状況に影響を与える可能性がある。

##### (3) 公共事業の動向について

当社グループの建築資材及び土木資材事業は、官公庁向けのものがあり、公共投資の動向の影響を受けている。公共投資の動向は日本国政府及び地方自治体の政策によって決定されるものであり、今後の公共投資が削減される場合、当社グループの業績及び財政状況に影響を与える可能性がある。

##### (4) 国外での事業活動について

当社グループは、アジア地域をはじめ、米国、中南米、欧州でも生産・販売事業を展開し、リスクを最小限にとどめるため情報収集に努めている。しかし、予期しない法律または規制の変更、不利な政治または経済要因、戦争や政情不安等の社会的混乱などにより、当社グループの業績及び財政状況に影響を与える可能性がある。

##### (5) 製造物責任について

当社グループは、製品の開発と生産にあたっては、安全性、品質に配慮している。また、国内外の法令と地方自治体や業界の定める規制、規格を遵守して事業活動を進めている。しかし、製品に予期しない欠陥が生じ、製品の回収や損害賠償につながるリスクが現実化する可能性がある。保険に加入し賠償への備えを行っているが、保険により補填できない事態が生じる場合、当社グループの業績及び財政状況に影響を与える可能性がある。

##### (6) 知的財産権について

当社グループは、第三者の知的財産権（特許権、実用新案権、意匠権、商標権、著作権等）を尊重し、製品や商品を製造、販売するに先立ち、第三者の知的財産権の調査を十分行い、侵害しないように努めている。しかし、第三者から知的財産権の侵害を理由とする予期しない訴訟を提起される可能性がある。こうしたリスクが顕在化した場合、当社グループの業績及び財政状況に影響を与える可能性がある。

##### (7) 産業事故災害について

当社グループは、事業活動の全般で、無事故、無災害に努めている。しかし、当社グループの事業拠点において、万一大きな産業事故災害が発生した場合には、それに伴って生ずる社会的信用の失墜、補償などを含む産業事故災害への対応費用、生産活動の停止による機会損失及び顧客に対する補償などによって、当社グループの業績及び財政状況に影響を与える可能性がある。

##### (8) 自然災害について

当社グループは、地震などの自然災害に備え事業拠点において耐震対策や定期点検、防災訓練等により、被害・損害を最小限にするための取り組みを行っている。しかし、想定を超える大規模な地震その他の自然災害により、当社グループの事業拠点が重大な被害を受けたり、原材料調達などサプライチェーンの障害に伴う生産活動停止による機会損失などによって、当社グループの業績及び財政状況に影響を与える可能性がある。

#### (9) 情報セキュリティについて

当社グループは、業務上必要な機密情報や個人情報等を有しており、これらの情報資産を適切に保護するため、情報セキュリティシステムを構築するとともに、「情報セキュリティ委員会」を設置して情報セキュリティ実施計画の策定や従業員への教育を行っている。また、各部門、各グループ会社に情報セキュリティ責任者を配置し、情報セキュリティ活動を統括して情報資産の適切な管理を行っている。しかし、外部からの予期せぬ攻撃や自然災害等で重要なシステムが使用不可能な状態になり当社グループの業務遂行に支障が生じた場合、あるいは内部からの情報漏洩や不正使用が発生し当社グループの信用が低下した場合、当社グループの業績及び財政状況に影響を与える可能性がある。

### 5 【経営上の重要な契約等】

#### 標章使用許諾に関する重要な契約

契約会社	相手方の名称	契約期間	契約内容
積水化成工業株式会社 (当社)	積水化学工業株式会社	平成元年10月1日より平成5年3月31日までとする。 但し、期間満了後特別の事情のない限り更に3年間継続し、以後この例による。	積水化学工業株式会社の所有する一定の標章（商標含む）の使用許諾の取得

### 6 【研究開発活動】

当社では、プラスチックを素材としたさまざまな分野において、基礎研究から生産管理技術に至るまで幅広い研究開発を行っている。当社の研究開発の中心となっている技術本部総合研究所では、新技術・新素材に関する研究開発や、全社技術開発に関する基礎研究を行っているほか、新製品研究開発の迅速化をはかるため、3つの研究室を設置し、それぞれの役割に応じた研究開発を行っている。合わせて、全社戦略製品の開発上市をスピードアップさせ事業化推進を強化するために、技術本部に事業化推進センターを設置している。また、各事業本部においては、担当する分野での新製品・新商品の開発や、品質改良・生産技術の革新などの役割を担っている。

連結子会社における研究開発活動は、親会社（当社）に委託することが多いため、個々の会社においては、個別の研究開発体制を設けていない。

なお、当連結会計年度における研究開発費の総額は、1,916百万円である。

また、セグメント別の研究開発を進めており、生活分野と工業分野それぞれにおいては、重合含浸技術・押出技術・発泡技術・微粒化技術・ゲル技術をベースとして市場ニーズに適合した機能性素材の開発、土木・環境システム商品に関する技術開発を行っている。当連結会計年度の主な成果は次のとおりである。

#### (1) 生活分野

第1に、防災拠点で大型重機等の特殊車両が通行することが可能な、唯一の樹脂製滞水材「アクアロード」が、東京消防庁 第九消防方面本部 消防救助機動部隊 隊舎で貯水量約1,000トン分が採用された。今後は、道路直下に適応可能な「アクアロード」をゲリラ豪雨等の対策として、国・地方公共団体等に積極的に展開していく。第2に、日本からアジアへの青果物の輸出専用包装資材の上市を進めるため、当社独自の軟質発泡素材「インターフォーム」のさらなる耐衝撃性の付与や、「エスレンビーズ」の高度な設計・成形技術を駆使し、温度・空気調整コンテナで保持した低活性化状態を維持することを目的とするコールドチェーン包装資材の開発に取り組んでいる。温度、湿度、雑菌、衝撃をしっかりと管理することを重視し、輸送実証実験を本格化させる。

これら生活分野に係る研究開発費は、284百万円である。

#### (2) 工業分野

第1に、「ピオセラン」を使用した座席シート部材がトヨタ自動車「C-HR」に採用された。ワイヤーと「ピオセラン」の一体成形品を芯材とすることによって、座席シートのウレタン使用量を削減して、軽量化を成し遂げたことが評価された。これによって、工数削減によるコストダウンと、軽量化による燃費改善効果や環境負荷軽減が期待されている。今後は、同社の各グローバル拠点で順次発売される同車種に対しての供給も計画している。第2に、熱可塑性エラストマービーズ発泡体「エラスティル」を開発した。熱可塑性エラストマーの優れた素材性能と、当社が長年培ったビーズ発泡体のノウハウを融合した材料であり、軽量性、断熱、形状自由度という特徴に加え、優れた高反発性、柔軟性、復元性を兼ね備えている。スポーツ用品をはじめ、自動車・工業製品、医療・介護、ホビー・日用品などの幅広い用途開発を進めていく。

これら工業分野に係る研究開発費は、1,632百万円である。

## 7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものである。

### (1) 財政状態の分析

#### (資産)

当連結会計年度末における流動資産の残高は、受取手形及び売掛金の減少などにより980百万円減少し、46,706百万円(前連結会計年度末は47,687百万円)となった。

当連結会計年度末における固定資産の残高は、有形固定資産の増加などにより5,759百万円増加し、72,963百万円(前連結会計年度末は67,204百万円)となった。

#### (負債)

当連結会計年度末における負債の残高は、短期借入金の増加などにより2,215百万円増加し、58,306百万円(前連結会計年度末は56,091百万円)となった。

#### (純資産の部)

当連結会計年度末における純資産の部の残高は、利益剰余金の増加などにより2,562百万円増加し、61,363百万円(前連結会計年度末は58,800百万円)となった。

### (2) キャッシュ・フローの分析

当連結会計年度のキャッシュ・フローの状況については、第2〔事業の状況〕1〔業績等の概要〕(2)キャッシュ・フローに記載のとおりである。

### (3) 経営成績の分析

当連結会計年度における売上高は102,398百万円(前期比0.8%増)、営業利益は5,401百万円(前期比5.5%増)、経常利益は5,049百万円(前期比3.9%増)、親会社株主に帰属する当期純利益は3,404百万円(前期比8.2%増)となった。

生活分野では食品容器関連の需要が好調に推移し、工業分野では自動車関連の部材用途で採用部位が拡大したこともあり、売上高、営業利益ともに増収増益となった。

営業外損益では、営業外収益が前期比で39百万円増加し407百万円となり、営業外費用が前期比で135百万円増加し759百万円となった。

特別損益では、特別利益として投資有価証券売却益117百万円など122百万円を、特別損失として支払補償費128百万円など190百万円を計上している。

なお、事業別の分析は、第2〔事業の状況〕1〔業績等の概要〕(1)業績に記載のとおりである。

### (4) 経営者の問題認識と次期の見通しについて

第2〔事業の状況〕3〔経営方針、経営環境及び対処すべき課題等〕に記載のとおりである。



### 第3【設備の状況】

#### 1【設備投資等の概要】

当社グループ（当社及び連結子会社）では、経営計画に沿った取組を実施しており、設備投資に関しては更新・補修・能力拡大を中心に投資を行い、当連結会計年度は、全体で5,836百万円の設備投資を実施した。

すべての分野において、更新・補修・能力拡大を中心に設備投資を実施した。各セグメント別の投資額は、生活分野が2,394百万円、工業分野が2,861百万円となっている。

なお、当連結会計年度において、主要な設備の廃棄及び売却はない。

#### 2【主要な設備の状況】

当社グループ（当社及び連結子会社）における主要な設備は、以下のとおりである。

##### (1) 提出会社

平成29年3月31日現在

事業所名	所在地	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額（百万円）					従業員数（人）
				建物及び構築物	機械装置及び運搬具	土地（面積㎡）	その他	合計	
本社 注1	大阪府 大阪市 他	生活分野 工業分野 消去又は全社	発泡樹脂・発泡シート加工設備 管理	1,523	906	5,684 (197,423)	437	8,552	—
総合研究所	奈良県 天理市	消去又は全社	研究開発	677	289	—	97	1,064	40
(子会社への賃貸) ㈱積水化成成品関東	茨城県 古河市	生活分野 工業分野	発泡樹脂・発泡シート製造設備	2,159	1,138	967 (80,960)	249	4,513	(110)
	茨城県 筑西市	生活分野	発泡シート製造設備	492	118	852 (50,982)	22	1,486	(13)
(子会社への賃貸) ㈱積水化成成品天理	奈良県 天理市	生活分野 工業分野	発泡シート製造設備	1,831	1,327	3,676 (92,406)	367	7,203	(107)
	岡山県 笠岡市	生活分野	発泡シート製造設備	232	247	401 (24,199)	33	914	(20)
(子会社への賃貸) ㈱積水化成成品滋賀	滋賀県 甲賀市	生活分野 工業分野	発泡樹脂製造設備	1,413	1,763	1,101 (70,083)	171	4,449	(82)
(子会社への賃貸) ㈱積水化成成品九州	大分県 中津市	生活分野	発泡シート製造設備	191	171	921 (64,708)	51	1,336	(23)

(注) 1. 子会社である㈱積水化成成品山口、積水化成成品埼玉等への賃貸分を含む。

2. 従業員数の( )は、子会社へ生産委託をしているため子会社での従業員数を外書している。

##### (2) 国内子会社

平成29年3月31日現在

会社名	事業所名（所在地）	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額（百万円）					従業員数（人）
				建物及び構築物	機械装置及び運搬具	土地（面積㎡）	その他	合計	
㈱積水技研	関西工場 (兵庫県加西市)	生活分野	発泡シート加工設備	52	118	244 (6,612)	11	426	160
㈱積水化成成品北海道	千歳工場 (北海道千歳市)	生活分野	発泡樹脂加工設備・発泡シート製造設備	295	167	149 (26,865)	17	630	51
	釧路工場 (北海道釧路市)	生活分野	発泡樹脂加工設備	137	46	114 (25,019)	7	306	11

#### 3【設備の新設、除却等の計画】

当社グループ（当社及び連結子会社）の設備投資計画に関しては、需要低迷に対応した投資圧縮など、資金の効率的活用を図るべく策定している。成長に向けた戦略投資を優先し、採算重視のシビアなプランニングを常に実践すべく、完工後のフォロー体制を含め提出会社を中心に策定している。

なお、当連結会計期年度末現在において、新たに確定した生産能力に重要な影響を与える設備の新設、拡充、改修、除却、売却等の計画はない。

## 第4【提出会社の状況】

### 1【株式等の状況】

#### (1)【株式の総数等】

##### ①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	124,751,000
計	124,751,000

(注) 平成28年6月24日開催の第72回定時株主総会において、株式併合に係る議案(2株を1株に併合)が承認可決されている。これにより、株式併合の効力発生日(平成28年10月1日)をもって、発行可能株式総数が124,751,000株となっている。

##### ②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (平成29年3月31日)	提出日現在発行数(株) (平成29年6月26日)	上場金融商品取引所名又は登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	46,988,109	46,988,109	東京証券取引所市場第一部	単元株式数 100株
計	46,988,109	46,988,109	—	—

(注) 平成28年6月24日開催の第72回定時株主総会決議により、効力発生日(平成28年10月1日)をもって、当社普通株式2株につき1株の割合で株式併合を実施した。これにより、発行済株式総数は、47,988,109株減少し、47,988,109株となった。また、平成29年3月13日開催の取締役会において、会社法第178条に基づき自己株式の消却を決議し、平成29年3月27日付で自己株式1,000,000株の消却を実施した。これにより、発行済株式総数は、46,988,109株となった。  
なお、平成28年5月19日開催の取締役会決議により、平成28年10月1日をもって、単元株式数を1,000株から100株に変更している。

#### (2)【新株予約権等の状況】

該当事項なし。

#### (3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項なし。

#### (4)【ライツプランの内容】

該当事項なし。

#### (5)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数増減数(株)	発行済株式総数残高(株)	資本金増減額(百万円)	資本金残高(百万円)	資本準備金増減額(百万円)	資本準備金残高(百万円)
平成28年10月1日 (注1)	△47,988,109	47,988,109	—	16,533	—	14,223
平成29年3月27日 (注2)	△1,000,000	46,988,109	—	16,533	—	14,223

(注) 1. 株式併合(当社普通株式2株につき1株の割合で併合)によるものである。  
2. 自己株式の消却による減少である。

## (6) 【所有者別状況】

平成29年3月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数 100株）								単元未満株式の状況 (株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数（人）	—	34	29	110	112	3	4,126	4,414	—
所有株式数 (単元)	—	118,529	5,163	178,405	51,168	7	116,312	469,584	29,709
所有株式数の 割合（%）	—	25.24	1.10	37.99	10.90	0.00	24.77	100.00	—

- (注) 1. 平成28年5月19日開催の取締役会決議により、平成28年10月1日をもって、単元株式数を1,000株から100株に変更している。
2. 自己株式1,100,430株は「個人その他」の欄に11,004単元、「単元未満株式の状況」の欄に30株を含めて記載している。

## (7) 【大株主の状況】

平成29年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合（%）
積水化学工業株式会社	大阪市北区西天満2丁目4番4号	9,978	21.23
第一生命保険株式会社 (常任代理人 資産管理サービス信託銀行株式会社)	東京都千代田区有楽町1丁目13番1号 (東京都中央区晴海1丁目8番12号)	3,031	6.45
積水化成品従業員持株会	大阪市北区西天満2丁目4番4号	1,887	4.01
積水樹脂株式会社	大阪市北区西天満2丁目4番4号	1,419	3.02
大同生命保険株式会社 (常任代理人 日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社)	大阪市西区江戸堀1丁目2番1号 (東京都中央区晴海1丁目8番11号)	1,418	3.01
株式会社エフピコ	広島県福山市曙町1丁目13番15号	1,348	2.87
株式会社三菱東京UFJ銀行	東京都千代田区丸の内2丁目7番1号	1,327	2.82
旭化成株式会社	東京都千代田区神田神保町1丁目105番地	1,250	2.66
デンカ株式会社	東京都中央区日本橋室町2丁目1番1号	1,250	2.66
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	1,117	2.37
計	—	24,028	51.13

- (注) 日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)の所有株式数のうち、信託業務に係る株式数は、1,117千株である。

## (8) 【議決権の状況】

## ① 【発行済株式】

平成29年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 1,209,700	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 45,748,700	457,487	—
単元未満株式	普通株式 29,709	—	—
発行済株式総数	46,988,109	—	—
総株主の議決権	—	457,487	—

(注) 平成28年6月24日開催の第72回定時株主総会決議により、効力発生日(平成28年10月1日)をもって、当社普通株式2株につき1株の割合で株式併合を実施した。これにより、発行済株式総数は、47,988,109株減少し、47,988,109株となった。また、平成29年3月13日開催の取締役会において、会社法第178条に基づき自己株式の消却を決議し、平成29年3月27日付で自己株式1,000,000株の消却を実施した。これにより、発行済株式総数は、46,988,109株となった。

なお、平成28年5月19日開催の取締役会決議により、平成28年10月1日をもって、単元株式数を1,000株から100株に変更している。

## ② 【自己株式等】

平成29年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
積水化成工業株式会社	大阪市北区西天満2丁目4番4号	1,100,400	—	1,100,400	2.34
優水化成工業株式会社	石川県金沢市南町5番20号	—	80,300	80,300	0.17
天理運輸倉庫株式会社	奈良県天理市森本町670番地	1,600	24,000	25,600	0.05
日本ケミカル工業株式会社	三重県四日市市生桑町336番地1	3,400	—	3,400	0.01
計	—	1,105,400	104,300	1,209,700	2.57

(注) 他人名義で所有している株式は、代理店、取引先等の持株会「積水化成工業取引先持株会」(大阪市北区西天満2丁目4番4号)名義の株式のうち、相互保有株式の持分残高を記載している。

## (9) 【ストックオプション制度の内容】

該当事項なし。

## 2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号、会社法第155条第7号及び会社法第155条第9号に該当する普通株式の取得

### (1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項なし。

### (2) 【取締役会決議による取得の状況】

会社法第155条第3号に該当する取得

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
取締役会 (平成29年2月10日) での決議状況 (取得期間 平成29年2月13日～平成29年2月28日)	875,000	831,250,000
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	875,000	718,525,000
残存決議株式の総数及び価額の総額	—	112,725,000
当事業年度の末日現在の未行使割合 (%)	—	13.6
当期間における取得自己株式	—	—
提出日現在の未行使割合 (%)	—	13.6

会社法第155条第9号に該当する取得

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
取締役会 (平成28年10月31日) での決議状況 (取得期間 平成28年10月31日)	223	買取単価に買取対象株式数を乗じた金額(注)
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	223	172,825
残存決議株式の総数及び価額の総額	—	—
当事業年度の末日現在の未行使割合 (%)	—	—
当期間における取得自己株式	—	—
提出日現在の未行使割合 (%)	—	—

(注) 平成28年6月24日開催の第72回定時株主総会決議により、効力発生日 (平成28年10月1日) をもって、当社普通株式2株につき1株の割合で株式併合を実施した。この株式併合により生じた1株に満たない端数の処理について、会社法第235条第2項、第234条第4項及び第5項の規定に基づく自己株式の買い取りを行ったものである。買取単価は、買取日の東京証券取引所における当社普通株式の終値である。

### (3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
当事業年度における取得自己株式	1,260	489,662
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 1. 平成28年6月24日開催の第72回定時株主総会決議により、効力発生日 (平成28年10月1日) をもって、当社普通株式2株につき1株の割合で株式併合を実施した。当事業年度における取得自己株式1,260株の内訳は、株式併合前1,131株、株式併合後129株である。  
2. 「当期間における取得自己株式」欄には、平成29年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式数は含めていない。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	1,000,000	716,230,000	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (株式併合による減少)	1,225,078	—	—	—
保有自己株式数	1,100,430	—	1,100,430	—

- (注) 1. 当期間における「その他」欄には、平成29年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の売渡による株式数は含めていない。  
2. 当期間における「保有自己株式数」欄には、平成29年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取及び売渡による株式数は含めていない。

3 【配当政策】

当社は、株主への利益還元を経営の重要課題として位置づけており、経営体質の強化ならびに将来の事業展開に備えるための内部留保を確保しつつ、連結業績の動向に応じた、かつ配当の安定性を勘案した利益還元を実施することを基本方針としている。また、配当政策については、連結配当性向30～40%を目処としている。

毎事業年度における配当の回数についての基本方針は、期末配当と中間配当の年2回である。これらの配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会である。

当事業年度の期末配当については、上記の剰余金の配当等に関する基本方針および配当政策を踏まえ、慎重に検討した結果、1株につき12円を実施することを決定した。なお、平成28年6月24日開催の第72回定時株主総会決議により、効力発生日(平成28年10月1日)をもって、当社普通株式2株につき1株の割合で株式併合を実施した。当該株式併合を踏まえて換算した場合、中間配当は12円となるので、期末配当12円を加えた当事業年度の年間配当金の合計は1株につき24円となった。この結果、当事業年度の配当性向は36.0% (連結配当性向は32.9%) となった。

また、自己株式については、平成29年2月に875,000株を取得し、3月に1,000,000株を消却した。

当社は、「取締役会の決議により、毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めている。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりである。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
平成28年10月31日 取締役会決議	561	6.00
平成29年6月23日 株主総会決議	550	12.00

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第69期	第70期	第71期	第72期	第73期
決算年月	平成25年3月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月
最高 (円)	303	295	492	505	367 (849)
最低 (円)	164	223	255	327	291 (694)

- (注) 1. 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第1部におけるものである。  
2. 平成28年6月24日開催の第72回定時株主総会決議により、効力発生日(平成28年10月1日)をもって、当社普通株式2株につき1株の割合で株式併合を実施した。第73期の株価については当該株式併合前の最高・最低株価を記載し、( )内に当該株式併合後の最高・最低株価を記載している。

## (2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成28年10月	11月	12月	平成29年1月	2月	3月
最高(円)	777	805	845	845	849	832
最低(円)	717	694	797	803	803	778

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第1部におけるものである。

## 5 【役員 の 状 況】

男性 13名 女性 一名 (役員のうち女性の比率-%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
代表取締役 社長	社長執行役員	柏原 正人	昭和34年6月29日生	昭和58年4月 当社入社 平成19年6月 当社第1事業本部技術部長 平成20年6月 当社取締役 平成23年6月 当社常務取締役 平成25年6月 当社代表取締役副社長 副社長執行役員 平成26年6月 当社代表取締役社長 社長執行役員 (現在に至る)	注3	126
取締役	専務執行役員 経営戦略本部長	佐野 芳秀	昭和27年11月12日生	昭和50年3月 当社入社 平成15年1月 当社製品事業本部機能材料事業部長 平成16年6月 当社取締役 平成19年6月 当社常務取締役 平成25年6月 当社取締役 常務執行役員 平成27年4月 当社取締役 専務執行役員 (現在に至る)	注3	144
取締役	常務執行役員 管理本部長	池垣 徹哉	昭和33年3月13日生	昭和55年4月 当社入社 平成18年3月 当社第1事業本部樹脂事業部長 平成21年6月 当社取締役 平成25年6月 当社取締役 常務執行役員 (現在に至る)	注3	91
取締役	常務執行役員 第2事業本部長	廣田 徹治	昭和34年1月24日生	昭和59年4月 当社入社 平成23年4月 当社第2事業本部副本部長 平成23年6月 当社取締役 平成25年6月 当社取締役退任 当社執行役員 平成27年6月 当社常務執行役員 平成28年6月 当社取締役 常務執行役員 (現在に至る)	注3	50
取締役	常務執行役員 技術本部長	辻脇 伸幸	昭和38年1月19日生	昭和60年4月 当社入社 平成23年4月 当社第2事業本部技術開発部長 平成23年6月 当社取締役 平成25年6月 当社取締役退任 当社執行役員 平成27年6月 当社常務執行役員 平成28年6月 当社取締役 常務執行役員 (現在に至る)	注3	58

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役	常務執行役員 第1事業本部長	塩田 哲也	昭和34年5月26日生	昭和58年4月 当社入社 平成25年1月 当社第1事業本部樹脂事業部長 平成27年6月 当社執行役員 平成29年6月 当社取締役 常務執行役員 (現在に至る)	注3	17
取締役		網本 勝彌	昭和22年6月10日生	昭和45年4月 株式会社藤田組(現、株式会社フジタ)入社 平成14年4月 同社執行役員 平成17年6月 同社代表取締役社長 平成20年4月 同社代表取締役 平成20年6月 同社非常勤顧問 平成23年6月 同社非常勤顧問退任 平成23年6月 当社取締役(現在に至る)	注3	15
取締役		馬場 宏之	昭和29年1月27日生	昭和51年4月 住友ゴム工業株式会社入社 平成12年3月 同社取締役 平成15年3月 同社執行役員 平成15年7月 同社執行役員退任 平成15年7月 S R I スポーツ株式会社(現、ダンロップスポーツ株式会社)代表取締役社長 平成23年3月 同社代表取締役会長 平成25年3月 同社取締役会長 平成27年3月 同社相談役(現在に至る) 平成27年6月 当社取締役(兼任、現在に至る)	注3	3
常勤監査役		守屋 雅之	昭和32年3月6日生	昭和54年4月 当社入社 平成22年1月 当社経営戦略本部経営企画部長 平成24年6月 当社常勤監査役(現在に至る)	注4	31
常勤監査役		宮下 幸一	昭和32年2月3日生	昭和55年4月 当社入社 平成23年8月 当社管理本部監査室長 平成29年6月 当社常勤監査役(現在に至る)	注5	9
監査役		濱部 祐一	昭和33年10月18日生	昭和57年4月 積水化学工業株式会社入社 平成24年4月 同社監査室長 平成28年6月 同社常勤監査役(現在に至る) 平成28年6月 当社監査役(兼任、現在に至る)	注4	—
監査役		長濱 守信	昭和31年12月18日生	昭和54年4月 第一生命保険相互会社(現、第一生命ホールディングス株式会社)入社 平成20年9月 同社執行役員 平成25年4月 同社常務執行役員 平成26年6月 同社取締役 常務執行役員 平成26年6月 当社監査役(兼任、現在に至る) 平成28年4月 同社取締役 専務執行役員 平成28年10月 同社取締役(上席常勤監査等委員)(現在に至る)	注4	2



役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
監査役		高坂 敬三	昭和20年12月11日生	昭和45年4月 弁護士登録、色川法律事務所入所 平成13年1月 同所代表 平成24年6月 当社監査役（兼任、現在に至る） 平成29年1月 同所顧問（現在に至る）	注4	—
計						551

- (注) 1. 取締役 網本勝彌氏、馬場宏之氏は、社外取締役である。  
2. 監査役 濱部祐一氏、長濱守信氏、高坂敬三氏は、社外監査役である。  
3. 平成29年6月23日開催の定時株主総会の終結の時から1年間  
4. 平成28年6月24日開催の定時株主総会の終結の時から4年間  
5. 平成29年6月23日開催の定時株主総会の終結の時から4年間  
6. 当社は、経営と業務執行の機能分担を明確にすることにより、経営機能・業務執行機能を強化するとともに、取締役数の最適化をはかり、取締役会の活性化及び意思決定の迅速化をはかるため、執行役員制度を導入している。執行役員の地位、氏名及び職名は次のとおりである（取締役兼務者を除く）。

地位	氏名	職名
常務執行役員	三日月仁司	第1事業本部生産統括部長、第2事業本部生産統括部長
常務執行役員	佐々木勝巳	経営戦略本部コーポレート企画センター長
執行役員	浅野 泰正	第1事業本部技術部長
執行役員	西口 満	人財開発センター長
執行役員	山口 勝己	技術本部事業化推進センター長
執行役員	寺田 隆丸	第2事業本部機能性ポリマー事業部長
執行役員	道場 雅巳	技術本部設備技術部長
執行役員	浅田 英志	第2事業本部グローバルテクニカルセンター長

## 6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

### (1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

#### (1) コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、すべてのステークホルダーに対して社会的責任を果たし、「グローバルに顧客から信頼されるプラスチック・ソリューション・カンパニー」を目指している。その目標を実現するために、コーポレート・ガバナンスを有効に機能させ、経営の透明性と健全性を確保し、経営環境の変化に即応できる経営体制を確立することが、重要な課題であると認識している。

なお、当社のコーポレートガバナンスに関する基本的な考え方と基本方針を定めた「コーポレートガバナンスガイドライン」を制定し、当社ウェブサイトに掲載している。

<http://www.sekisuiplastics.co.jp/ir/governance/pdf/guideline.pdf>

#### (2) 現状の体制を採用している理由

当社は、監査役制度を採用しており、取締役会及び監査役会により、業務執行の監視、監督を行っている。

取締役は8名のうち社外取締役は2名であり、客観的な観点からの経営監督機能を担うとともに、取締役会の意思決定の妥当性と透明性を確保している。監査役は5名のうち社外監査役は3名であり、監査役または監査役会への適時適切な重要事項の報告体制を整備することにより、監査機能を強化し、経営判断の合理性・透明性・公正性を確保している。

こうした現状の体制にて、経営判断の合理性・透明性・公正性の確保及び客観的・中立的な視点での経営の監督機能の両面で、十分に機能する体制が整っていると判断している。

なお、有価証券報告書提出日現在において、取締役、監査役及び執行役員に女性はいないが、女性の活躍推進に向けて、意欲のある女性従業員に対して、教育支援を実施し、基幹職（いわゆる管理職に相当）登用、職域拡大をはかる方針をとっている。

#### (3) 現状の体制の概要

当社は、以下の各機関で構成される統治機構によって、業務執行、監督・監査を行いコーポレート・ガバナンス体制が整っていると判断している。

取締役は8名、うち社外取締役2名で、経営の意思決定を合理的かつ効率的に行うことを目指している。重要案件については、取締役会や常務会で決定する仕組みとなっている。取締役の経営責任を明確にし、経営環境の変化に迅速に対応できる経営体制を構築するため、取締役の任期を1年としている。さらに、重要な経営テーマごとに各委員会を設置し、事業本部制を補完しつつスピーディーで合理的な意思決定を目指すとともに、コンプライアンス・倫理等について相互牽制も果たしている。

## 1. 業務執行

### ①取締役会（ほぼ月1回開催）

取締役会は、8名の取締役からなり、社長が議長を務め業務執行に関する事項を報告・審議・決議し、業務執行を監督している。また、社外取締役2名及び社外監査役3名を含む監査役5名全員が出席し、適宜、意見陳述を行っている。

### ②常務会（月1回以上開催）

常務会は、社長の諮問機関であり、経営の基本政策及び経営方針に係る事項の審議ならびに各部門の重要な執行案件について審議している。常務会に付議された議案のうち重要なものは、取締役会に付議され、その審議を受けている。常務会は、常勤の社内取締役全員6名及び執行役員8名（取締役を兼務する執行役員を除く）をもって構成し、意思決定の迅速化と業務運営の効率化をはかり、重要な業務執行への対応を行っている。また、常勤監査役2名が出席し、必要があると認めるときは、適宜、意見陳述を行っている。

### ③主な委員会等

#### a. CSR統括委員会（年2回開催）

社長を委員長とし、事業活動の全般における環境・安全の確保及び品質保証、コンプライアンス、社会貢献及び環境マネジメントに関する重要課題ならびにその対応について審議している。下部組織として、社会貢献委員会、保安委員会、RC（レスポンシブル・ケア）内部監査委員会、コンプライアンス委員会があり、各委員会を統括している。

#### b. 投融资審議会（月1回開催）

経営戦略本部長を委員長とし、当社グループにおける重要な設備投資や融資に関する個別審議を行っている。

## 2. コンプライアンス体制

①コンプライアンス委員会を設置し、法令遵守を維持する体制を整えている。コンプライアンス委員会は、年2回定期的に会議を開催しており、当社グループにおけるコンプライアンスに関する問題等を審議している。また、一定規模のグループ会社では当社と同様にコンプライアンス委員会を設置し、その他のグループ会社にはコンプライアンス責任者をおき、連携をはかっている。

②企業の社会的責任を遂行するため、内部通報窓口としてコンプライアンス委員会事務局及び顧問弁護士に通じるホットラインを設け、公正で活力ある組織の構築に努めている。

③法律事務所と顧問契約を締結し、企業経営及び日常業務に関して経営上の判断の参考とするため、必要に応じて指導及び助言を随時受ける体制としている。

### (4) 業務の適正を確保するための体制

①積水化成成品グループにおける取締役および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制

当社は、監査役が取締役会ならびに常務会の重要会議に出席することにより、意思決定の適法性を確保するほか、各事業所、各子会社において内部監査部門である監査室が会計監査および業務監査を行い、環境・保安安全・品質管理については、RC内部監査委員会が監査を行う。化学メーカーとして重要な課題である環境・安全関係の法令等については、それを専管する組織として、社長を委員長とする「CSR統括委員会」を設置する。

また、社内通報制度「SKGクリーン・ネットワーク」により、コンプライアンス上の問題が生じた場合には、積水化成成品グループに働く全ての人が、直接社内窓口および社外の弁護士窓口に通報できる仕組みを設けている。その通報内容は秘守し、通報者に対して、不利益な扱いを行わないことを「社内通報制度運用規則」に定める。

さらに、財務報告の信頼性を確保するための内部統制を整備し、その適切な運用管理にあたる。

②取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制

当社は、職務の執行・意思決定に係る情報を文書により保存し、それら文書の保存期間その他の管理体制については、「文書管理規則」によるものとする。また、取締役、監査役および執行役員はこれらの文書等を常時閲覧できるものとする。

情報の管理については、「情報セキュリティ基本規則」および「個人情報保護規則」により対応する。

③積水化成成品グループにおける損失の危険の管理に関する規程その他の体制

当社は、品質、安全、環境および情報セキュリティ等に係るリスクについては各規則を制定し積水化成成品グループにおける基本原則を定めるとともに、それぞれ該当する委員会においてリスク管理を行い、他のリスクに関しては各部門長および子会社の取締役による自律的な管理を基本とし、リスクの対応策を講じる。

また、「危機管理マニュアル」を策定し、積水化成成品グループの役員および使用人に周知徹底させることで、リスクの発生防止に努めるとともに、有事においては、「緊急事態対応措置要項」により、社長を本部長とする「緊急対策本部」が統括して危機管理にあたる。

#### ④積水化成品グループにおける取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

当社は、定例の取締役会をほぼ月1回開催し、重要事項の決定ならびに業務執行状況の監督等を行う。なお、取締役会における経営の意思決定機能の最適化をはかるとともに、業務執行とその監督機能の分離をすすめ、それぞれの機能を強化するため、執行役員制度を採用する。また、取締役会の機能をより強化し経営効率を向上させるため、常勤の取締役、常勤監査役および執行役員が出席する常務会を毎月1回以上開催し、業務執行に関する基本事項および重要事項の審議を行う。さらに、社長、各本部長ほかをメンバーとするスタッフミーティングを設け、絞り込んだテーマについて、議論を行う。

業務運営については、将来の事業環境を踏まえグループ中期経営計画およびグループ年度計画を立案し、積水化成品グループの目標を設定する。各部門および各子会社においては、その目標達成に向け具体策を立案、実行する。

なお、変化の激しい経営環境に機敏に対応するため、IT技術を活用した電子役員会議室で議論を行うなど業務の効率化をはかるとともに、経営上重要な情報を識別し、確実に取締役および執行役員に伝達されるシステムを構築する。

#### ⑤積水化成品グループにおける業務の適正を確保するための体制

積水化成品グループのコンプライアンスについては、当社の「コンプライアンス委員会」が統括、推進するほか、主な子会社においても各社に「コンプライアンス委員会」を設置し、その他の子会社にはコンプライアンス責任者を置き、業務の適正を確保する。また、「積水化成品グループコンプライアンス行動指針」を制定し、役員および使用人が法令等に基づき誠実に行動することを定め、「積水化成品グループコンプライアンスマニュアル」の策定により、役員および使用人が企業倫理に従って行動するための指針を提示するとともに、当該コンプライアンスマニュアルを用いた研修を行い、コンプライアンス意識の醸成をはかる。

さらに、当社内部監査部門である監査室による監査や当社監査役、会計監査人による監査を通して適法性を確保する。

なお、当社子会社の経営管理については、監査役および監査室等によるモニタリングを行うとともに、「関係会社管理規則」および「関係会社決裁基準書」により、事業内容の定期的な報告と重要案件についての事前審議および決裁を行う。

また、グループ経営理念・事業ビジョンに基づく中期経営計画の策定内容や業務執行状況および決算などの財務状況に関する定期的なヒアリングを実施するとともに、「グループ会社社長会」などを通じて、企業集団内での相互の情報の共有化をはかる。

反社会的勢力に対しては毅然とした行動をとり、一切関係を持たないことを当該行動指針および当該コンプライアンスマニュアルに定め、周知徹底するとともに、反社会的勢力排除のための社内体制の整備強化を推進する。

#### ⑥監査役の職務を補助すべき使用人の取締役からの独立性および当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項

監査役が補助すべき使用人を置くことを取締役に要請した場合、取締役は監査役と協議のうえ、補助使用人を置く。

監査役の下に補助すべき使用人を置く場合、当該使用人の異動等については、監査役会の同意を要する。

監査役により監査業務に必要な命令を受けた使用人は、他の業務に優先してこれを遂行することとし、当該命令について取締役および執行役員等からの指揮命令権が及ばないこととする。

#### ⑦監査役の職務の執行について生ずる費用に関する事項

取締役および執行役員は、監査役または監査役会が監査の実施のために弁護士、会計監査人その他の社外の専門家に対して助言を求め、または調査、鑑定その他の事務を委託するなどし、所要の費用を請求するときは、当該請求にかかる費用が監査役または監査役会の職務の執行に必要でないと認められる場合を除き、その費用を負担する。

また、監査役の職務の執行について生ずる費用等を支弁するため、毎年、一定額の予算を設ける。

#### ⑧積水化成品グループにおける取締役および使用人が監査役に報告するための体制

取締役および執行役員は、積水化成品グループに著しい損害を及ぼすおそれのある事実、その他積水化成品グループの経営上重要な影響を及ぼす事実を発見したときは、直ちに監査役に報告する。さらにその報告体制の整備をはかる。

また、監査役は重要な意思決定の過程や業務の執行状況を把握するため、取締役会には監査役全員が、常務会には常勤監査役が出席するほか、決裁書その他業務執行に関する重要な文書を開覧し、必要に応じて取締役、執行役員または使用人にその説明を求める。

さらに、当社の使用人または子会社の取締役、監査役および使用人は、監査役から業務執行に関する事項について報告を求められたときは、速やかに適切な報告を行う。当該報告を行ったことを理由として、報告者に対して、不利益な扱いを行わない。

また、監査役はコンプライアンス委員会に出席し、積水化成品グループにおける社内通報制度の内容およびコンプライアンス上の問題について報告を受ける。

なお、内部監査部門である監査室は、当社および子会社への会計監査および業務監査を行い、監査結果はその都度、代表取締役、担当取締役および監査役に報告する。

#### ⑨その他監査役による監査が実効的に行われることを確保するための体制

監査役は、会計監査人が実施した会計監査の説明を受けて、定期的に意見交換会を行うほか、常勤監査役は会計監査人が実施する各事業所への監査に立会うなど、会計監査人と連携、協調をはかり、監査の充実に努める。

### (5) 監査役監査の状況

#### ①監査役による監査にかかる体制

監査役は、常勤監査役2名、社外監査役3名で構成し、各監査役は監査役会で定めた監査方針、監査計画等に従い、取締役会及び重要会議への出席や、職務執行状況及び経営状態の調査等を行い、法令・定款違反や株主利益を侵害する事実の有無等について監査を行っている。監査役会はほぼ月1回開催している。

常勤監査役は、社内に精通し経営に対する理解が深く、適法性監査に加え、重要な会議に出席し、経営課題に対するプロセスと結果について客観的評価を行う等、的確な分析に基づく発言をすることで、経営監視の実効性を高めている。また、常勤監査役の守屋雅之氏は、システム・経理・経営企画等で、常勤監査役の宮下幸一氏は、システム・経営企画・内部監査等で、それぞれ長年にわたり企業の会計に関する事務の経験を持ち、財務及び会計に関する相当程度の知見を有していると判断している。

また、監査役は、内部監査部門である監査室との定期的な会合や業務執行の担当取締役及び重要な使用者から個別ヒアリングの機会を設けるとともに、社長、会計監査人それぞれとの間で適宜意見交換を行い、連携、協調をはかり、監査の充実に努めている。

なお、監査役が補助すべき使用者を置くことを取締役等に要請した場合、取締役は監査役と協議のうえ、補助使用者を置くことを取締役会で決議している。

#### ②監査役と会計監査人の連携状況

当社の監査役は、会計監査人が実施した会計監査の説明を受けて、定期的に意見交換を行うほか、常勤監査役は会計監査人が実施する各事業所への監査に立会うなど、会計監査人と連携、協調をはかり、監査の充実に努めている。

#### ③監査役と内部監査部門の連携状況

当社は、内部監査部門として「監査室」を設置しており、監査結果はその都度、監査役に報告され、その報告を参考に監査役は往査を実施している。また、監査役は監査室に対し必要に応じて特定事項の調査を依頼している。

### (6) 社外取締役及び社外監査役の状況

当社の社外取締役は、上場会社の代表取締役経験者であり、経営者として豊富な経験に基づき、取締役の業務執行の監督、経営方針や経営計画等に対する意見及び取締役や主要株主等との利益相反取引の監督などを行うとともに、ステークホルダーの意見を取締役会に反映させている。

社外取締役に対する情報伝達体制として、取締役会審議事項について経営企画部から事前に資料を配付し説明するとともに、特に重要な議案については社内取締役により十分な説明を行っている。

網本勝彌氏は、長年にわたって企業経営に携わった実績を有しており、その豊富な知識と経験で当社の経営執行に対し、独立した立場より助言いただくことでコーポレート・ガバナンスを強化できるものと判断し、選任している。同氏が平成20年まで代表取締役に就任していた株式会社フジタとの間に、当社グループは製品等の取引があるが、平成28年度において、当社グループから同社への販売実績は、当社の連結売上高の0.005%未満である。また、当社グループは同社へ設備工事を発注しているが、平成28年度において同社の売上高の0.01%未満であり、当社からの独立性については十分確保されていると判断している。

馬場宏之氏は、長年にわたって企業経営に携わった実績を有しており、その豊富な知識と経験で当社の経営執行に対し、独立した立場より助言いただくことでコーポレート・ガバナンスを強化できるものと判断し、選任している。同氏が相談役に就任しているダンロップスポーツ株式会社グループと当社グループとの間に取引関係はなく、当社からの独立性については十分確保されていると判断している。

当社の社外監査役は、独自の立場で、業務監査を行うとともに、常勤監査役の業務監査の独立性・公正性についてモニタリングをするという重要な役割を担っている。

社外監査役に対する情報伝達体制として、常務会の審議事項について常勤監査役から社外監査役に説明を行っている。また、社外監査役は必要に応じて、常勤監査役とともに各事業所の往査も実施している。

濱部祐一氏は、長年にわたって企業経営に携わっており、その豊富な知識と経験を当社の監査にいかしていただくために選任している。同氏が常勤監査役に就任している積水化学工業株式会社は、当社の株式を21.23%保有している。なお、当社グループは積水化学工業株式会社グループとの間に製品等の取引があるが、平成28年度において、当社グループから同社グループへの販売実績は、当社の連結売上高の1.3%未満、同社グループから当社グループへの販売実績は、同社の連結売上高の0.06%未満であり、同氏の社外監査役としての独立性は損なわれまいと判断している。

長濱守信氏は、長年にわたって企業経営に携わっており、その豊富な知識と経験を当社の監査にいかしていただくために選任している。同氏は第一生命ホールディングス株式会社の取締役（上席常勤監査等委員）に就任しており、同社の子会社である第一生命保険株式会社は、当社の株式を6.45%保有している。また、当社グループは第一生命保険株式会社へ保険料等の支払いがあるが、その額は平成28年度において、第一生命ホールディングス株式会社グループの連結経常収益の0.006%未満であり、また、当社の主要な借入先には該当しておらず、当社からの独立性については十分確保されていると判断している。

高坂敬三氏は、弁護士として企業法務に対する幅広い知見があり、この知見を当社の監査にいかしていただくため選任している。同氏は弁護士であり、同氏及び同氏が顧問に就任している色川法律事務所と当社との間に顧問契約等の取引関係はなく、当社からの独立性については十分確保されていると判断している。

網本勝彌氏、馬場宏之氏、長濱守信氏、高坂敬三氏については、当社が策定した「社外役員の選任及び独立性に関する基準」を満たしている。また、東京証券取引所に対し、独立役員として届け出ており、経営陣から一定の距離にある外部者の立場で、取締役会に参加することにより、取締役の職務執行の状況について明確な説明を求めることとなり、経営監視の実効性を高めている。

なお、各社外役員の当社株式所有数は「5 役員の状況」に記載している。また、いずれの社外役員もその他の利害関係はない。

#### (7) 社外役員の選任及び独立性に関する基準

##### (目的)

第1条 本基準は、当社における社外取締役及び社外監査役の選任及び独立性に関する基準を定めることを目的とする。

##### (社外取締役)

第2条 社外取締役は、以下の各号に定める条件を満たす者の中から選任する。なお、性別、国籍は問わない。

1. 誠実な人格、高い識見と能力を有し、当社取締役会に多様な視点を取り入れる観点から、広範な知識と経験及び出身分野における実績を有する者
2. 会社法第331条第1項各号に定める取締役の欠格事由に該当しない者
3. 会社法第2条第15号に定める社外取締役の要件を満たす者

##### (社外監査役)

第3条 社外監査役は、以下の各号に定める条件を満たす者の中から選任する。なお、性別、国籍は問わない。

1. 誠実な人格、高い識見と能力を有し、特に法律、会計、企業経営等の分野における高度な専門知識と豊富な経験を有する者
2. 会社法第335条第1項で準用する同法第331条第1項各号に定める監査役の欠格事由に該当しない者
3. 会社法第2条第16号に定める社外監査役の要件を満たす者

##### (社外役員の独立性)

第4条 当社における社外取締役又は社外監査役（以下、併せて「社外役員」と総称する。）のうち、以下の各号のいずれの基準にも該当しない社外役員は、独立性を有するものと判断されるものとする。

1. 当社の大株主（直近の事業年度末における議決権保有比率が総議決権の10%以上を保有する者）又はその業務執行者である者
2. 当社を主要な取引先とする者又はその業務執行者である者
3. 当社の主要な取引先又はその業務執行者である者
4. 当社又は連結子会社の会計監査人又はその社員等として当社又は連結子会社の監査業務を担当している者
5. 当社から役員報酬以外に、年間1,000万円を超える金銭その他の財産を得ている弁護士、司法書士、弁理士、公認会計士、税理士、コンサルタント等（ただし、当該財産を得ている者が法人、組合等の団体である場合は、その団体に所属する者）
6. 当社の主要借入先（直近の事業年度にかかる事業報告において主要な借入先として氏名又は名称が記載されている借入先）又はその業務執行者である者
7. 当社から年間1,000万円を超える寄付を受けている者（ただし、当該寄付を得ている者が法人、組合等の団体である場合は、その団体の業務執行者である者）
8. 過去3年間において、上記1から7のいずれかに該当していた者
9. 上記1から8のいずれかに掲げる者（ただし、重要な者に限る。）の二親等以内の親族
10. 当社又は子会社の取締役、執行役員、理事、支配人、使用人、会計参与（法人である場合は、その職務を行うべき社員を含む。）の二親等以内の親族
11. 過去3年間において、当社又は子会社の取締役、執行役員、理事、支配人、使用人、会計参与（法人である場合は、その職務を行うべき社員を含む。）のいずれかに該当していた者の二親等以内の親族

12. 前各号のほか、当社と利益相反関係が生じうるなど、独立性を有する社外役員としての職務を果たすことができない特段の事由を有している者
- ② 本条に基づき独立性を有するものと判断されている社外役員は、独立性を有しないこととなった場合は、直ちに当社に告知するものとする。
- ③ 本条において「当社を主要な取引先とする者」とは、直前事業年度における当社から当該取引先への支払額が当該取引先の年間連結売上高の2%を超える者をいう。  
また、「当社の主要な取引先」とは、直前事業年度における当社への当該取引先からの支払額が当社の年間連結売上高の2%を超える者をいう。

(8) 責任限定契約の内容の概要

当社定款に基づき、当社が社外役員と締結した責任限定契約の内容の概要は次のとおりである。

取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）または監査役は、本契約締結後、その職務を行うにつき善意でかつ重大な過失がないときは、会社法第425条第1項に定める最低責任限度額を限度として、損害賠償責任を負うものとする。

(9) 内部監査の状況

内部監査は、監査室（4名）を設け、監査計画書に基づき、法令遵守、リスク管理、内部統制システムの運用状況等、業務全般にわたり監査を実施し、組織の内部管理体制の適正性を総合的、客観的に評価している。また、内部監査を定期的実施しており、監視と業務改善に向けて、具体的な助言及び指導を行っている。監査室は、会計監査人と定期的に意見交換を行っている。

なお、環境・保安安全・品質管理に関する内部監査については、別途、RC内部監査委員会（8名）が行っている。

当社グループに対する監査は、監査室及びRC内部監査委員会が、グループ会社監査を行っている。

(10) 会計監査人による監査の状況

当社は会計監査人として、新日本有限責任監査法人と監査契約を締結し、適宜会計に関する指導を受けており、監査業務は、あらかじめ監査日程を策定し、計画的に監査が行える体制を整備している。

業務を執行した公認会計士の氏名	所属する監査法人名	継続監査年数
指定有限責任社員 業務執行社員 小西 幹男	新日本有限責任監査法人	—
指定有限責任社員 業務執行社員 松浦 大	新日本有限責任監査法人	—

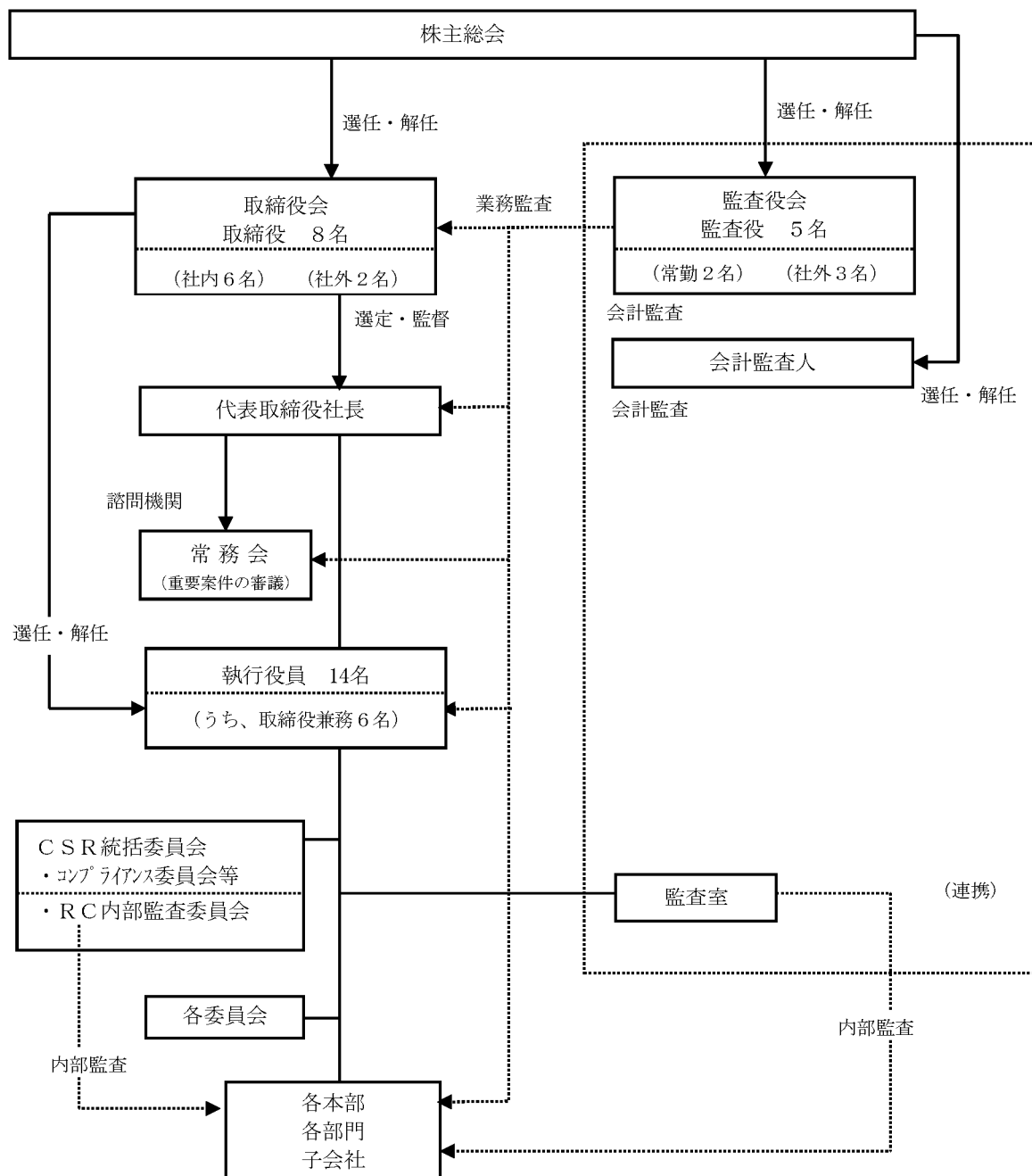
当社の会計監査業務は、上記2名を含む公認会計士14名及びその他14名によって行われている。

継続監査年数については7年以内であるため記載を省略している。

(11) 社外取締役または社外監査役による監督・監査と内部監査、監査役監査、会計監査と内部統制部門との関係

社外取締役及び社外監査役は、取締役会及び監査役会において、内部監査、監査役監査、会計監査及び内部統制部門からの報告を受け適宜意見を述べている。また、これらの報告を通じて、相互連携や内部統制の監督・監査を行っている。

以上の業務執行・経営の監視の仕組み、内部統制システムを図示すると次のとおりである。



## (12) 取締役及び監査役の報酬等の額

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額 (百万円)		対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬	役員賞与	
取締役 (社外取締役を除く)	130	119	11	8
監査役 (社外監査役を除く)	46	43	3	2
社外役員	32	28	4	6
計	210	190	19	16

- (注) 1. 取締役の報酬等の額には、使用人兼務取締役の使用人分給与は含んでいない。
2. 対象となる役員の員数には、当事業年度中に退任した取締役2名及び社外役員1名 (うち社外監査役1名) を含んでいる。
3. 役員賞与は、当事業年度において計上した役員賞与引当金繰入額である。
4. 役員の報酬等の額またはその算定方法の決定に関する方針
- 取締役の報酬等については、株主総会の決議により、取締役全員の報酬総額の最高限度額が定められている。各取締役の報酬等の額は、独立社外取締役の意見を踏まえた上で、取締役会の授権を受けた代表取締役が、当社の定める一定の基準に基づき決定している。報酬等は、①月額報酬と②賞与から構成されている。①月額報酬は、役位ごとの役割の大きさや責任範囲によるもの、業績によるものからなっており、②賞与は、当期の会社業績等を勘案し、それぞれ支給することとしている。また、中長期の業績を反映させる観点から、取締役は、月額報酬の一定額以上を拠出して役員持株会を通じて自社株式を購入することとしており、この購入した株式は、取締役在任期間中、その全てを保有すべきこととしている。
- 監査役の報酬等については、株主総会の決議により、監査役全員の報酬総額の最高限度額を決定している。各監査役の報酬等の額は、監査役の協議により決定している。
- なお、役員退職慰労金制度については、平成19年6月22日開催の第63回定時株主総会終結の時をもって廃止した。

## (13) 当社定款における定め概要

## ①取締役に関する定め

当社の取締役は、10名以内とする。株主総会での取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行い、累積投票によらないものとする。

## ②自己の株式の取得に関する定め

機動的な資本政策を遂行することが可能となるよう、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる。

## ③株主総会の決議の方法に関する定め

株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことができるよう、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う。

## ④中間配当に関する定め

株主への機動的な利益還元を行うため、会社法第454条第5項の規定により、毎年9月30日を基準日として、取締役会の決議によって、中間配当金として剰余金の配当を行うことができる。



(14) 提出会社の株式の保有状況

1. 投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額  
25銘柄 13,471百万円

2. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的  
(前事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
㈱エフピコ	1,732,730	8,343	(注) 1
積水樹脂㈱	1,266,410	1,909	(注) 1
㈱きんでん	338,082	466	(注) 1
積水ハウス㈱	214,915	408	(注) 1
デンカ㈱	676,187	313	(注) 1、2
住友化学㈱	609,000	309	(注) 1
㈱T&Dホールディングス	154,400	162	(注) 1
第一生命保険㈱	72,000	98	(注) 1
㈱高速	79,860	69	(注) 1
高島㈱	125,000	22	(注) 1
日本マクドナルドホールディングス㈱	1,000	2	(注) 1

(注) 1. 相手企業との関係・提携強化をはかる目的で、保有している。

2. 電気化学工業㈱は、平成27年10月1日をもって、商号をデンカ㈱に変更している。

みなし保有株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
㈱エフピコ	600,000	2,889	(注) 1

(注) 1. 退職給付信託の信託財産に抛出しているが、信託約款の定めにより議決権行使の指図権を留保している。

2. 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算していない。

(当事業年度)  
 特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
(株)エフピコ	1,732,730	8,975	(注) 1
積水樹脂(株)	1,266,410	2,341	(注) 1
(株)きんでん	338,082	525	(注) 1
積水ハウス(株)	214,915	393	(注) 1
デンカ(株)	676,187	390	(注) 1
(株)T&Dホールディングス	154,400	249	(注) 1
住友化学(株)	300,000	186	(注) 1
第一生命ホールディングス(株)	72,000	143	(注) 1、2
(株)高速	79,860	89	(注) 1
高島(株)	125,000	24	(注) 1

(注) 1. 相手企業との関係・提携強化をはかる目的で、保有している。

2. 第一生命保険(株)は、平成28年10月1日をもって、商号を第一生命ホールディングス(株)に変更している。

みなし保有株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
(株)エフピコ	600,000	3,108	(注) 1

(注) 1. 退職給付信託の信託財産に拠出しているが、信託約款の定めにより議決権行使の指図権を留保している。

2. 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算していない。

3. 純投資目的で保有する株式  
 該当事項なし。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく 報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報 酬 (百万円)	監査証明業務に基づく 報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報 酬 (百万円)
提出会社	48	3	48	4
連結子会社	—	—	—	—
計	48	3	48	4

②【その他重要な報酬の内容】

(前連結会計年度)

当社の連結子会社であるSekisui Plastics Korea Co., Ltd.、Sekisui Plastics S.E.A. Pte.Ltd.、Sekisui Plastics (Thailand) Co.,Ltd.は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークであるERNST&YOUNGグループに対して合計5百万円の監査報酬を支払っている。

(当連結会計年度)

当社の連結子会社であるSekisui Plastics Korea Co., Ltd.、Sekisui Plastics S.E.A. Pte.Ltd.、Sekisui Plastics (Thailand) Co.,Ltd.は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークであるERNST&YOUNGグループに対して合計5百万円の監査報酬を支払っている。

③【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

(前連結会計年度)

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、財務デューデリジェンスにかかる支援業務、国外子会社の計算書類に関する助言業務、申請書類作成に関する支援業務である。

(当連結会計年度)

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、財務デューデリジェンスにかかる支援業務、国外子会社の計算書類に関する助言業務である。

④【監査報酬の決定方針】

該当事項はないが、監査日数等を勘案し、監査役会の同意を得て決定している。

## 第5【経理の状況】

### 1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成している。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成している。  
また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成している。

### 2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(平成28年4月1日から平成29年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(平成28年4月1日から平成29年3月31日まで)の財務諸表について、新日本有限責任監査法人により監査を受けている。

### 3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っている。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、当該変更などについての的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、セミナーへ参加している。

## 1 【連結財務諸表等】

## (1) 【連結財務諸表】

## ① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	7,146	6,271
受取手形及び売掛金	28,286	27,072
電子記録債権	1,146	1,956
商品及び製品	6,814	6,601
仕掛品	89	206
原材料及び貯蔵品	2,326	2,782
繰延税金資産	1,004	738
その他	965	1,167
貸倒引当金	△93	△89
流動資産合計	47,687	46,706
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	※3 40,728	※3 43,400
減価償却累計額	△26,443	△27,347
建物及び構築物 (純額)	14,284	16,052
機械装置及び運搬具	63,991	67,133
減価償却累計額	△55,082	△56,234
機械装置及び運搬具 (純額)	8,909	10,899
土地	※2, ※3 20,591	※2, ※3 20,906
建設仮勘定	1,895	1,112
その他	10,841	11,312
減価償却累計額	△9,482	△9,769
その他 (純額)	1,359	1,543
有形固定資産合計	47,040	50,513
無形固定資産		
のれん	—	94
ソフトウェア	541	549
その他	369	351
無形固定資産合計	910	995
投資その他の資産		
投資有価証券	※1 14,909	※1 16,222
繰延税金資産	607	620
退職給付に係る資産	2,993	3,768
その他	833	897
貸倒引当金	△90	△55
投資その他の資産合計	19,253	21,454
固定資産合計	67,204	72,963
資産合計	114,892	119,670

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
支払手形及び買掛金	14,184	14,991
電子記録債務	7,057	7,924
短期借入金	※3 7,293	※3 9,451
未払費用	2,687	2,728
未払法人税等	1,044	683
未払消費税等	358	121
繰延税金負債	1	—
賞与引当金	1,043	988
役員賞与引当金	36	35
設備関係支払手形	155	152
営業外電子記録債務	811	1,061
その他	1,385	1,529
流動負債合計	36,058	39,667
固定負債		
長期借入金	※3 10,981	※3 8,973
繰延税金負債	3,799	4,409
再評価に係る繰延税金負債	※2 1,596	※2 1,596
退職給付に係る負債	2,706	2,878
製品補償引当金	549	389
その他	399	392
固定負債合計	20,032	18,639
負債合計	56,091	58,306
<b>純資産の部</b>		
株主資本		
資本金	16,533	16,533
資本剰余金	17,261	16,544
利益剰余金	16,257	18,351
自己株式	△798	△802
株主資本合計	49,253	50,627
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	6,187	7,495
土地再評価差額金	※2 1,479	※2 1,479
為替換算調整勘定	275	187
退職給付に係る調整累計額	914	845
その他の包括利益累計額合計	8,856	10,007
非支配株主持分	691	729
純資産合計	58,800	61,363
負債純資産合計	114,892	119,670

## ②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

## 【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
売上高	101,559	102,398
売上原価	77,386	77,091
売上総利益	24,173	25,307
販売費及び一般管理費	※1,※2 19,054	※1,※2 19,905
営業利益	5,118	5,401
営業外収益		
受取利息	10	8
受取配当金	207	271
持分法による投資利益	2	—
その他	146	126
営業外収益合計	367	407
営業外費用		
支払利息	138	139
持分法による投資損失	—	10
為替差損	107	276
その他	377	333
営業外費用合計	624	759
経常利益	4,862	5,049
特別利益		
投資有価証券売却益	80	117
退職給付信託解約益	448	—
その他	38	4
特別利益合計	567	122
特別損失		
支払補償費	—	128
災害による損失	—	62
減損損失	※3 136	※3 —
製品補償引当金繰入額	518	—
厚生年金基金脱退損失	110	—
その他	4	0
特別損失合計	769	190
税金等調整前当期純利益	4,659	4,980
法人税、住民税及び事業税	1,487	1,232
法人税等調整額	53	335
法人税等合計	1,540	1,568
当期純利益	3,119	3,412
非支配株主に帰属する当期純利益	△27	7
親会社株主に帰属する当期純利益	3,147	3,404

## 【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
当期純利益	3,119	3,412
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	10	1,307
土地再評価差額金	94	—
為替換算調整勘定	△648	△91
退職給付に係る調整額	△1,066	△69
その他の包括利益合計	△1,609	1,147
包括利益	※1 1,510	※1 4,559
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	1,538	4,551
非支配株主に係る包括利益	△28	7

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	16,533	17,261	14,091	△796	47,089
当期変動額					
剰余金の配当			△981		△981
親会社株主に帰属する 当期純利益			3,147		3,147
自己株式の取得				△2	△2
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	2,165	△2	2,163
当期末残高	16,533	17,261	16,257	△798	49,253

	その他の包括利益累計額					非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額 金	為替換算調整勘 定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計		
当期首残高	6,176	1,384	923	1,981	10,465	720	58,275
当期変動額							
剰余金の配当							△981
親会社株主に帰属する 当期純利益							3,147
自己株式の取得							△2
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	10	94	△648	△1,066	△1,608	△28	△1,637
当期変動額合計	10	94	△648	△1,066	△1,608	△28	525
当期末残高	6,187	1,479	275	914	8,856	691	58,800



当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	16,533	17,261	16,257	△798	49,253
当期変動額					
剰余金の配当			△1,215		△1,215
親会社株主に帰属する 当期純利益			3,404		3,404
連結除外による減少			△2		△2
連結子会社増加による 減少			△92		△92
自己株式の取得				△720	△720
自己株式の消却		△716		716	—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	△716	2,094	△3	1,374
当期末残高	16,533	16,544	18,351	△802	50,627

	その他の包括利益累計額					非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額 金	為替換算調整勘 定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計		
当期首残高	6,187	1,479	275	914	8,856	691	58,800
当期変動額							
剰余金の配当							△1,215
親会社株主に帰属する 当期純利益							3,404
連結除外による減少							△2
連結子会社増加による 減少							△92
自己株式の取得							△720
自己株式の消却							—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	1,307	—	△87	△69	1,151	37	1,188
当期変動額合計	1,307	—	△87	△69	1,151	37	2,562
当期末残高	7,495	1,479	187	845	10,007	729	61,363

## ④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益	4,659	4,980
減価償却費	3,937	3,591
減損損失	136	—
のれん償却額	—	10
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	73	△38
受取利息及び受取配当金	△218	△280
支払利息	138	139
持分法による投資損益 (△は益)	△2	10
賞与引当金の増減額 (△は減少)	125	△79
製品補償引当金の増減額 (△は減少)	446	△160
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	169	124
投資有価証券売却損益 (△は益)	△81	△117
投資有価証券評価損益 (△は益)	1	—
固定資産除売却損益 (△は益)	26	63
売上債権の増減額 (△は増加)	△32	1,528
たな卸資産の増減額 (△は増加)	752	△168
仕入債務の増減額 (△は減少)	△290	871
その他	△1,086	△1,525
小計	8,755	8,950
利息及び配当金の受取額	217	281
利息の支払額	△177	△122
損害保険金の受取額	14	17
法人税等の支払額又は還付額 (△は支払)	△1,288	△1,705
営業活動によるキャッシュ・フロー	7,521	7,421
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
定期預金の預入による支出	△6	△2
定期預金の払戻による収入	—	7
有形固定資産の取得による支出	△4,116	△5,170
有形固定資産の売却による収入	17	113
投資有価証券の取得による支出	△3	△7
投資有価証券の売却による収入	155	242
貸付けによる支出	△835	△415
貸付金の回収による収入	25	32
関係会社株式の取得による支出	△211	—
連結範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	—	△258
その他	208	△46
投資活動によるキャッシュ・フロー	△4,766	△5,505
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	△116	414
長期借入れによる収入	934	1,700
長期借入金の返済による支出	△1,788	△2,790
自己株式の取得による支出	△1	△719
配当金の支払額	△981	△1,215
非支配株主への配当金の支払額	△0	△6
その他	△378	△335
財務活動によるキャッシュ・フロー	△2,332	△2,953
現金及び現金同等物に係る換算差額	△315	5
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	106	△1,030
現金及び現金同等物の期首残高	7,030	7,137
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	—	161
連結除外に伴う現金及び現金同等物の減少額	—	△1
現金及び現金同等物の期末残高	※1 7,137	※1 6,266

## 【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

### 1. 連結の範囲に関する事項

連結子会社の数 32社

主要な連結子会社名は「第1. 企業の概況 4. 関係会社の状況」に記載しているため省略している。

(増 加) 2社

当連結会計年度より、㈱ヤマキユウの株式を取得したため、また、Sekisui Plastics Mexico S.A. de C.V. の重要性が高まったため、連結の範囲に含めている。

(減 少) 1社

Sekisui Plastics Industrial Materials(Thailand)Co.,Ltd.については、重要性がないため、当連結会計年度より、連結の範囲から除外している。

非連結子会社の数 3社

PT. Sekisui Summitpack Indonesia、Sekisui Plastics Creative Design(Thailand)Co.,Ltd.、Sekisui Plastics Industrial Materials(Thailand)Co.,Ltd. は重要性がないため、連結の範囲に含めていない。

### 2. 持分法の適用に関する事項

#### (1) 持分法適用の関連会社数 1社

主要な会社名

優水化成工業㈱

#### (2) 持分法を適用していない非連結子会社 (PT. Sekisui Summitpack Indonesia、Sekisui Plastics

Creative Design(Thailand)Co.,Ltd.、Sekisui Plastics Industrial Materials(Thailand)Co.,Ltd.) 及び関連会社 (日本ケミカル工業㈱他) は、当期純損益 (持分に見合う額) 及び利益剰余金 (持分に見合う額) 等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため持分法を適用していない。

### 3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

海外子会社のうち5社の決算日は、12月31日であるが、連結決算日現在で本決算に準じた仮決算を行った財務諸表を基礎としている。

### 4. 会計方針に関する事項

#### (1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

たな卸資産

移動平均法による原価法 (貸借対照表価額は収益性の低下による簿価切下げの方法により算定)

#### (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産 (リース資産を除く)

建物、建物附属設備及び構築物

定額法を採用している。

その他

提出会社及び連結子会社は主として定額法を採用しており、一部の連結子会社は定率法を採用している。

主な設備の耐用年数は以下のとおりである。

建物 主に31~38年

機械装置 主に8年

無形固定資産 (リース資産を除く)

ソフトウェア (自社利用)

社内における利用可能期間 (5年) に基づく定額法を採用している。

その他

定額法を採用している。

リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用している。

#### (3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上している。

#### 賞与引当金

従業員に支給する賞与に充てるため、当連結会計年度に対応する支給見込額を計上している。

#### 役員賞与引当金

役員賞与の支出に備えて、当連結会計年度における支給見込額に基づき計上している。

#### 製品補償引当金

提出会社は、製品の品質に関する補償費用の支出に備えるため、今後必要と見込まれる金額を計上している。

#### (4) 退職給付に係る会計処理の方法

##### ① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっている。

##### ② 数理計算上の差異の処理方法

数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（5年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理している。

#### (5) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理している。なお、在外子会社の資産及び負債、収益及び費用は、在外子会社の決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び非支配株主持分に含めて計上している。

#### (6) 重要なヘッジ会計の方法

##### ① ヘッジ会計の方法

金利通貨スワップについて、要件を満たしているため一体処理（特例処理・振当処理）を、為替予約については振当処理を採用している。

##### ② ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段	ヘッジ対象
金利通貨スワップ	外貨建長期借入金
為替予約	外貨建未収入金

##### ③ ヘッジ方針

内部管理規則で定めるリスク管理方法に基づき、金利変動リスク及び為替変動リスクをヘッジしている。

##### ④ ヘッジ有効性評価の方法

一体処理を採用している金利通貨スワップ及び振当処理を採用している為替予約については、有効性の評価を省略している。

#### (7) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、5年間の定額法により償却を行っている。

#### (8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっている。

#### (9) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

##### ① 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は税抜方式によっている。

##### ② 連結納税制度の適用

当社及び一部の連結子会社は、連結納税制度を適用している。

#### (会計方針の変更)

(会計上の見積りの変更と区別することが困難な会計方針の変更)

従来、当社及び大半の国内連結子会社は、建物（建物付属設備を除く）については主として定額法、その他の有形固定資産（リース資産を除く）については主として定率法を採用していたが、当連結会計年度より定額法に変更している。

平成28年4月に公表した中期経営計画「Make Innovations 60」は、グローバルでの生産体制を構築・増強する方針である。国内の既存設備に関しては、維持・更新を中心とした設備投資計画を策定している。当該設備投資計画の策定を契機に、あるべき減価償却方法について検討を進めた。

国内の主力製品であるエスレンビーズ・エスレンシート等においては、将来の需要は安定的に推移することが見込まれていることから、今後は既存設備の維持・更新投資を中心に実施する予定である。

以上により、当社及び大半の国内連結子会社の有形固定資産の安定稼働が見込まれることから、定額法に変更することが会社の経済的実態をより適切に反映させることができると判断した。

この変更により、従来の方法に比べて、当連結会計年度の営業利益、経常利益及び税金等調整前当期純利益は、それぞれ621百万円増加している。

(表示方法の変更)

(連結貸借対照表)

前連結会計年度において、「流動資産」の「受取手形及び売掛金」に含めていた「電子記録債権」は、資産の総額の100分の1を超えたため、当連結会計年度より独立掲記することとした。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組み替えを行っている。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「受取手形及び売掛金」に表示していた29,432百万円は、「受取手形及び売掛金」28,286百万円、「電子記録債権」1,146百万円として組み替えている。

(連結損益計算書)

前連結会計年度において、「営業外費用」の「支払補償費」及び「固定資産除売却損」は、営業外費用の総額の100分の10以下となったため、当連結会計年度より「その他」に含めて表示することとした。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組み替えを行っている。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外費用」に表示していた「支払補償費」86百万円及び「固定資産除売却損」68百万円は、「その他」377百万円として組み替えている。

(連結貸借対照表関係)

※1 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
投資有価証券(株式)	1,092百万円	653百万円

※2 土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号及び平成13年3月31日公布法律第19号による一部改正)に基づき、事業用の土地の再評価を行い、評価差額のうち、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上している。

- ・再評価の方法…土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第3号に定める固定資産税評価額による方法で算出している。
- ・再評価を行った年月日…平成14年3月31日

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
再評価を行った土地の期末における時価と再評価後の帳簿価額との差額	△3,493百万円	△3,546百万円

※3 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
土地	—	166百万円
建物	—	58
計	—	225

担保付債務は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
短期借入金	—	41百万円
長期借入金	—	105
計	—	147

## (連結損益計算書関係)

※1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
保管・運送費	4,640百万円	4,879百万円
給与手当・賞与	4,661	4,756
賞与引当金繰入額	546	461
貸倒引当金繰入額	54	△11
役員賞与引当金繰入額	31	24
退職給付費用	△601	△382

※2 一般管理費に含まれる研究開発費の総額

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
	1,856百万円	1,916百万円

※3 減損損失

前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

当連結会計年度において、当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上している。

場所	用途	種類
千葉県佐倉市	遊休資産	土地
中国天津市	工場	建物及び機械装置等

当社グループは、原則として、事業用資産については事業別管理会計区分を基準としてグルーピングを行っており、遊休資産については個別資産ごとにグルーピングを行っている。

当連結会計年度において、事業の用に供していない遊休資産のうち、時価が著しく下落した資産グループの帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失(90百万円)として特別損失に計上している。その内訳は、土地90百万円である。なお、当資産グループの回収可能価額は不動産鑑定評価額により評価している。

また、子会社1社において事業損益が継続的に悪化しているため、工場関連資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失(45百万円)として特別損失に計上している。その内訳は、建物25百万円、機械装置13百万円、その他5百万円である。なお、当資産グループの回収可能価額は使用価値により測定しており、将来キャッシュ・フローを4.03%で割り引いて算定している。

当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

該当事項なし。

## (連結包括利益計算書関係)

## ※1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	250百万円	1,950百万円
組替調整額	△3	△79
税効果調整前	247	1,871
税効果額	△236	△563
その他有価証券評価差額金	10	1,307
土地再評価差額金：		
当期発生額	—	—
組替調整額	—	—
税効果調整前	—	—
税効果額	94	—
土地再評価差額金	94	—
為替換算調整勘定：		
当期発生額	△648	△91
組替調整額	—	—
税効果調整前	△648	△91
税効果額	—	—
為替換算調整勘定	△648	△91
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	△458	431
組替調整額	△1,149	△531
税効果調整前	△1,607	△99
税効果額	541	30
退職給付に係る調整額	△1,066	△69
その他の包括利益合計	△1,609	1,147

## (連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

## 1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期 首株式数 (千株)	当連結会計年度増 加株式数 (千株)	当連結会計年度減 少株式数 (千株)	当連結会計年度末 株式数 (千株)
発行済株式				
普通株式	95,976	—	—	95,976
合計	95,976	—	—	95,976
自己株式				
普通株式 (注)	2,494	5	—	2,499
合計	2,494	5	—	2,499

(注) 普通株式の自己株式の株式数の増加5千株は、単元未満株式の買取りによる増加3千株、持分法適用関連会社取得した自己株式(当社株式)の当社帰属分1千株である。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円) (注)	1株当たり配当 額 (円)	基準日	効力発生日
平成27年6月23日 定時株主総会	普通株式	514	5.50	平成27年3月31日	平成27年6月24日
平成27年11月4日 取締役会	普通株式	467	5.00	平成27年9月30日	平成27年12月4日

(注) 持分法適用関連会社が保有する自己株式にかかる配当金のうち、持分相当額を控除している。

なお、控除前の金額は、平成27年6月23日定時株主総会については、514百万円であり、平成27年11月4日取締役会については、467百万円である。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり配 当額 (円)	基準日	効力発生日
平成28年6月24日 定時株主総会	普通株式	654	利益剰余金	7.00	平成28年3月31日	平成28年6月27日

当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期 首株式数 (千株)	当連結会計年度増 加株式数 (千株)	当連結会計年度減 少株式数 (千株)	当連結会計年度末 株式数 (千株)
発行済株式				
普通株式 (注) 1	95,976	—	48,988	46,988
合計	95,976	—	48,988	46,988
自己株式				
普通株式 (注) 2, 3	2,499	878	2,251	1,127
合計	2,499	878	2,251	1,127

(注) 1. 普通株式の発行済株式の株式数の減少48,988千株は、株式併合による減少47,988千株、自己株式の消却による減少1,000千株である。

2. 普通株式の自己株式の株式数の増加878千株は、取締役会決議による自己株式の取得による増加875千株、単元未満株式の買取りによる増加1千株、持分法適用関連会社が取得した自己株式(当社株式)の当社帰属分2千株である。

3. 普通株式の自己株式の株式数の減少2,251千株は、株式併合による減少1,251千株、取締役会決議による自己株式の消却による減少1,000千株である。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円) (注)	1株当たり配当 額 (円)	基準日	効力発生日
平成28年6月24日 定時株主総会	普通株式	654	7.00	平成28年3月31日	平成28年6月27日
平成28年10月31日 取締役会	普通株式	560	6.00	平成28年9月30日	平成28年12月7日

(注) 1. 持分法適用関連会社が保有する自己株式にかかる配当金のうち、持分相当額を控除している。

なお、控除前の金額は、平成28年6月24日定時株主総会については、654百万円であり、平成28年10月31日取締役会については、561百万円である。

2. 平成28年10月31日取締役会決議に基づく1株当たり配当額については、基準日が平成28年9月30日であるため、平成28年10月1日を効力発生日とした株式併合は加味していない。



## (2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり配 当額 (円)	基準日	効力発生日
平成29年6月23日 定時株主総会	普通株式	550	利益剰余金	12.00	平成29年3月31日	平成29年6月26日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

## ※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
現金及び預金勘定	7,146百万円	6,271百万円
預入期間が3か月を超える定期預金	△9	△5
現金及び現金同等物	7,137	6,266

(リース取引関係)

重要性が乏しいため記載を省略した。

(金融商品関係)

## 1. 金融商品の状況に関する事項

## (1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については短期的な預金等に限定し、また、資金調達については当面は銀行借入による方針である。デリバティブは、後述するリスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行わない方針である。

## (2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

当社は、営業債権である受取手形及び売掛金、電子記録債権については、営業取引管理規則に従い、各事業部門、販売管理部において、取引先の信用状況の定期的なモニタリングや、取引先ごとに回収状況や回収期日及び残高管理を行い、顧客の信用リスクへ対応している。また、当社グループ各社においても、当社の営業取引管理規則に準じて、同様の管理を行っている。

投資有価証券は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、これらは市場価格の変動リスクを伴っているが、経理部門において四半期毎に時価の把握を行っている。

営業債務である支払手形及び買掛金、電子記録債務は、すべて1年以内の支払期日である。

借入金のうち、短期借入金は主に営業取引に係る資金調達であり、長期借入金は主に設備投資に係る資金調達である。変動金利の借入金は、金利の変動リスクを伴っている。なお、一部長期借入金については、金利及び為替変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした、金利通貨スワップ取引を行っている。

デリバティブ取引は、業務遂行上、金融商品の取引を行うに当たって抱える可能性のある市場リスクを適切に管理し、当該リスクの低減を図ることを目的とする場合にのみ行っており、投機的な取引は行っていない。なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジの有効性の評価方法等については、前述の「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (6) 重要なヘッジ会計の方法」」に記載している。

また、営業債務や借入金は、流動性リスクを伴っているが、当社において、資金調達の円滑化、多様化に努めるとともに、当社グループ各社においても毎月資金繰り計画を作成するなどの方法により、そのリスクを回避している。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりである。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれていない（（注）2. 参照）。

前連結会計年度（平成28年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	7,146	7,146	—
(2) 受取手形及び売掛金	28,286	28,286	—
(3) 電子記録債権	1,146	1,146	—
(4) 投資有価証券 其他有価証券	13,645	13,645	—
資産計	50,224	50,224	—
(1) 支払手形及び買掛金	14,184	14,184	—
(2) 電子記録債務	7,057	7,057	—
(3) 短期借入金	4,662	4,662	—
(4) 長期借入金（※）	13,611	13,721	110
負債計	39,515	39,626	110

（※）1年以内返済予定の長期借入金2,630百万円を含んでいる。

当連結会計年度（平成29年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	6,271	6,271	—
(2) 受取手形及び売掛金	27,072	27,072	—
(3) 電子記録債権	1,956	1,956	—
(4) 投資有価証券 其他有価証券	15,400	15,400	—
資産計	50,701	50,701	—
(1) 支払手形及び買掛金	14,991	14,991	—
(2) 電子記録債務	7,924	7,924	—
(3) 短期借入金	5,188	5,188	—
(4) 長期借入金（※）	13,237	13,048	△188
負債計	41,340	41,151	△188

（※）1年以内返済予定の長期借入金4,263百万円を含んでいる。

（注）1. 金融商品の時価の算定方法及び有価証券に関する事項

資 産

- (1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金、(3) 電子記録債権

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっている。

- (4) 投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっている。また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「有価証券関係」注記に記載している。

負 債

- (1) 支払手形及び買掛金、(2) 電子記録債務、(3) 短期借入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっている。

- (4) 長期借入金

長期借入金の時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっている。ただし、変動金利による長期借入金は、金利スワップの特例処理の対象とされており、当該金利スワップと一体として処理された元利金の合計額を、同様の残存期間の借入を行った場合に適用される合理的に見積もられる利率で割り引いて算定する方法によっている。

## (注) 2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

区分	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
非上場株式(百万円)	1,263	822

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(4) 投資有価証券」には含めていない。

## (注) 3. 金銭債権の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(平成28年3月31日)

	1年以内(百万円)
預金	7,113
受取手形及び売掛金	28,286
電子記録債権	1,146
合計	36,546

当連結会計年度(平成29年3月31日)

	1年以内(百万円)
預金	6,243
受取手形及び売掛金	27,072
電子記録債権	1,956
合計	35,272

## (注) 4. 短期借入金及び長期借入金の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(平成28年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	4,662	—	—	—	—	—
長期借入金	2,630	3,622	5,231	1,989	78	59
合計	7,293	3,622	5,231	1,989	78	59

当連結会計年度(平成29年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	5,188	—	—	—	—	—
長期借入金	4,263	6,045	2,742	108	47	29
合計	9,451	6,045	2,742	108	47	29

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度 (平成28年 3月31日)

種類		連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	13,645	4,789	8,855
	債券	—	—	—
	その他	—	—	—
	小計	13,645	4,789	8,855
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株式	—	—	—
	債券	—	—	—
	その他	—	—	—
	小計	—	—	—
合計		13,645	4,789	8,855

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額 171百万円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めていない。

当連結会計年度 (平成29年 3月31日)

種類		連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	15,400	4,673	10,727
	債券	—	—	—
	その他	—	—	—
	小計	15,400	4,673	10,727
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株式	0	0	△0
	債券	—	—	—
	その他	—	—	—
	小計	0	0	△0
合計		15,400	4,673	10,727

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額 169百万円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めていない。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	306	81	—
債券	—	—	—
その他	—	—	—
合計	306	81	—

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

種類	売却額（百万円）	売却益の合計額（百万円）	売却損の合計額（百万円）
株式	242	117	—
債券	—	—	—
その他	—	—	—
合計	242	117	—

（デリバティブ取引関係）

1. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

金利通貨関連

前連結会計年度（平成28年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 （百万円）	契約額等のうち 1年超 （百万円）	時価 （百万円）
金利通貨スワップの 一体処理（特例処 理・振当処理）	金利通貨スワップ取引 変動受取・固定支払 米ドル受取・円支払	長期借入金	3,000	3,000	（注）1
為替予約の振当処理	為替予約 売建 香港ドル	長期未収入金	139	139	（注）2

（注）1 金利通貨スワップの一体処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載している。

2 振当処理の要件を満たしている為替予約については振当処理されている長期未収入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期未収入金の時価に含めて記載している。

当連結会計年度（平成29年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 （百万円）	契約額等のうち 1年超 （百万円）	時価 （百万円）
金利通貨スワップの 一体処理（特例処 理・振当処理）	金利通貨スワップ取引 変動受取・固定支払 米ドル受取・円支払	長期借入金	3,000	3,000	（注）1
為替予約の振当処理	為替予約 売建 香港ドル	未収入金	139	—	（注）2

（注）1 金利通貨スワップの一体処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載している。

2 振当処理の要件を満たしている為替予約については振当処理されている未収入金と一体として処理されているため、その時価は、当該未収入金の時価に含めて記載している。

（退職給付関係）

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、確定給付型の制度として、キャッシュバランス類似型の企業年金制度、企業年金制度（規約型）及び退職一時金制度を設けている。また、従業員の退職等に際して、退職給付会計に準拠した数理計算による退職給付債務の対象とされない割増退職金を支払う場合がある。

当社においては退職給付信託を設定している。

なお、一部の連結子会社は、確定拠出型の制度を設けており、また、一部の連結子会社が有する確定給付型の制度及び退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算している。

## 2. 確定給付制度

### (1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表（簡便法を適用した制度を除く）

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
退職給付債務の期首残高	9,930百万円	10,223百万円
勤務費用	247	261
利息費用	62	32
数理計算上の差異の発生額	554	△158
退職給付の支払額	△611	△557
その他	39	39
退職給付債務の期末残高	10,223	9,839

### (2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表（簡便法を適用した制度を除く）

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
年金資産の期首残高	14,456百万円	13,171百万円
期待運用収益	267	261
数理計算上の差異の発生額	96	271
事業主からの拠出額	453	445
退職給付の支払額	△604	△557
退職給付信託の解約に伴う減少額	△1,498	—
年金資産の期末残高	13,171	13,592

### (3) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	2,505百万円	2,661百万円
退職給付費用	295	361
退職給付の支払額	△155	△204
制度への拠出額	△9	△21
その他	25	67
退職給付に係る負債の期末残高	2,661	2,863

### (4) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(平成28年3月31日)	(平成29年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	10,335百万円	9,943百万円
年金資産	△13,314	△13,685
	△2,978	△3,741
非積立型制度の退職給付債務	2,691	2,851
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△287	△890
退職給付に係る負債	2,706	2,878
退職給付に係る資産	△2,993	△3,768
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△287	△890

(注) 簡便法を適用した制度を含む。

## (5) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
勤務費用	247百万円	261百万円
利息費用	62	32
期待運用収益	△267	△261
数理計算上の差異の費用処理額	△1,149	△531
簡便法で計算した退職給付費用	295	361
確定給付制度に係る退職給付費用	△810	△137

## (6) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
数理計算上の差異	△1,607百万円	△99百万円
合 計	△1,607	△99

## (7) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
未認識数理計算上の差異	△1,314百万円	△1,214百万円
合 計	△1,314	△1,214

## (8) 年金資産に関する事項

## ① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
債券	38%	24%
株式	40	44
生保一般勘定	17	14
現金及び預金	1	4
その他	4	14
合 計	100	100

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度24%、当連結会計年度25%含まれている。

## ② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮している。

## (9) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表わしている。）

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
割引率	0.3%	0.4%
長期期待運用収益率	1.9%	2.0%
予想昇給率	2.8%	2.8%

## 3. 確定拠出制度

連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）5百万円、当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）7百万円である。

## (税効果会計関係)

## 1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
繰延税金資産		
退職給付に係る負債	868百万円	647百万円
繰越欠損金	637	748
賞与引当金	330	313
未実現利益に係る一時差異	506	499
投資有価証券評価損	110	45
棚卸資産評価損	74	66
その他	492	421
繰延税金資産小計	3,019	2,741
評価性引当額	△568	△524
繰延税金資産合計	2,451	2,216
繰延税金負債		
土地評価差額金	△952	△985
その他有価証券評価差額金	△2,668	△3,231
退職給付信託設定益	△137	△126
退職給付に係る資産	△399	△369
その他	△482	△554
繰延税金負債合計	△4,640	△5,267
繰延税金資産の純額	△2,188	△3,050

(注) 1. 前連結会計年度及び当連結会計年度における繰延税金資産の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれている。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
流動資産－繰延税金資産	1,004百万円	738百万円
固定資産－繰延税金資産	607	620
流動負債－繰延税金負債	△1	—
固定負債－繰延税金負債	△3,799	△4,409

2. 上記の他、土地の再評価に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として、以下のとおり計上している。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
再評価に係る繰延税金負債	1,596百万円	1,596百万円

## 2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略している。	法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略している。

## (企業結合等関係)

重要性が乏しいため記載を省略した。

## (資産除去債務関係)

重要性が乏しいため記載を省略した。

## (賃貸等不動産関係)

重要性が乏しいため記載を省略した。



(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象としている。

当社は、プラスチックを基軸として、「生活」、「工業」の2つの分野において、グローバルに事業展開すべく、市場、用途別の事業部を置いている。各事業部は、子会社と連携し包括的な戦略を立案し、事業活動を展開している。

したがって、当社グループは、事業部を基礎とした製品の市場・用途別のセグメントから構成されており、「生活分野」、「工業分野」の2つを報告セグメントとしている。

「生活分野」では、主に農水産物輸送容器及び食品容器、建設資材関連製品などを製造・販売しており、「工業分野」では、主に自動車、デジタル家電などに使用される部材、梱包材及び関連製品などを製造、販売している。

2. 報告セグメントの変更等に関する事項

会計方針の変更に記載のとおり、従来、当社及び大半の国内連結子会社は、建物（建物付属設備を除く）については主として定額法、その他の有形固定資産（リース資産を除く）については主として定率法を採用していたが、当連結会計年度より定額法に変更している。

この変更に伴い、従来の方法に比べ、当連結会計年度のセグメント利益は、生活分野が392百万円、工業分野が175百万円、調整額が53百万円増加している。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一である。

報告セグメントの利益は、経常利益ベースの数値である。セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいている。

4. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報  
前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			調整額 (注1)	合計 (注2)
	生活分野	工業分野	計		
売上高					
外部顧客への売上高	64,589	36,969	101,559	—	101,559
セグメント間の内部売上高又は振替高	3,397	1,593	4,991	△4,991	—
計	67,987	38,562	106,550	△4,991	101,559
セグメント利益	3,575	2,260	5,836	△974	4,862
セグメント資産	69,749	33,236	102,986	11,905	114,892
その他の項目					
減価償却費	1,865	1,633	3,498	438	3,937
のれんの償却額	—	—	—	—	—
受取利息	0	7	7	2	10
支払利息	817	263	1,080	△941	138
持分法投資利益又は損失（△）	2	—	2	—	2
減損損失	90	45	136	—	136
持分法適用会社への投資額	367	—	367	—	367
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	1,665	2,263	3,929	494	4,424

（注） 1. 調整額は以下のとおりである。

- (1) セグメント利益の調整額△974百万円には、セグメント間取引消去△8百万円、各報告セグメントに配分していない全社費用△965百万円、固定資産未実現利益0百万円が含まれている。
  - (2) セグメント資産の調整額11,905百万円の主なものは、提出会社での投資有価証券及び管理部門・総合研究所にかかる資産等である。
  - (3) 減価償却費には、長期前払費用の償却額を含んでおり、調整額438百万円の主なものは、提出会社での管理部門・総合研究所にかかる償却費等である。
  - (4) 支払利息は、各セグメントが所有する資産に対して社内金利を配賦している。支払利息の調整額は、各セグメントに社内金利を配賦した額と実際の支払利息との差額である。
  - (5) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額494百万円の主なものは、総合研究所にかかる資産等である。
2. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っている。
  3. 各セグメントに属する主要な製品の名称
    - ・生活分野—— エスレンビーズ、エスレンシート、エスレンウッド、インターフォーム、これら成形加工品、ESダンマット、エスレンブロックなど
    - ・工業分野—— ピオセラン、ライトロン、ネオミクロレン、セルペット、テクポリマー、テクノゲル、STレイヤー、フォーマック、これら成形加工品など

	報告セグメント			調整額 (注1)	合計 (注2)
	生活分野	工業分野	計		
売上高					
外部顧客への売上高	62,233	40,165	102,398	—	102,398
セグメント間の内部売上高又は振替高	2,467	1,874	4,342	△4,342	—
計	64,701	42,039	106,741	△4,342	102,398
セグメント利益	3,802	1,969	5,771	△722	5,049
セグメント資産	68,339	39,468	107,808	11,862	119,670
その他の項目					
減価償却費	1,579	1,606	3,186	405	3,591
のれんの償却額	—	10	10	—	10
受取利息	0	5	5	3	8
支払利息	845	348	1,193	△1,054	139
持分法投資利益又は損失（△）	△10	—	△10	—	△10
減損損失	—	—	—	—	—
持分法適用会社への投資額	354	—	354	—	354
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	2,394	2,861	5,255	581	5,836

(注) 1. 調整額は以下のとおりである。

- (1) セグメント利益の調整額△722百万円には、セグメント間取引消去8百万円、各報告セグメントに配分していない全社費用△729百万円、固定資産未実現利益△1百万円が含まれている。
  - (2) セグメント資産の調整額11,862百万円の主なものは、提出会社での投資有価証券及び管理部門・総合研究所にかかる資産等である。
  - (3) 減価償却費には、長期前払費用の償却額を含んでおり、調整額405百万円の主なものは、提出会社での管理部門・総合研究所にかかる償却費等である。
  - (4) 支払利息は、各セグメントが所有する資産に対して社内金利を配賦している。支払利息の調整額は、各セグメントに社内金利を配賦した額と実際の支払利息との差額である。
  - (5) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額581百万円の主なものは、総合研究所にかかる資産等である。
2. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っている。
  3. 各セグメントに属する主要な製品の名称
    - ・生活分野—— エスレンビーズ、エスレンシート、エスレンウッド、インターフォーム、これら成形加工品、ESダンマット、エスレンブロックなど
    - ・工業分野—— ピオセララン、ライトロン、ネオミクロレン、セルペット、テクポリマー、テクノゲル、フォーマック、STレイヤー、エラストイル、これら成形加工品など

【関連情報】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

報告セグメントと同一区分のため、記載を省略している。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	アジア	その他	合計
86,280	12,138	3,140	101,559

(注)売上高は、顧客の所在地を基礎とし、地域に分類している。

(2) 有形固定資産

(単位：百万円)

日本	アジア	その他	合計
40,219	4,088	2,732	47,040

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
株式会社エフピコ	13,569	生活分野

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

報告セグメントと同一区分のため、記載を省略している。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	アジア	その他	合計
85,344	14,211	2,842	102,398

(注)売上高は、顧客の所在地を基礎とし、地域に分類している。

(2) 有形固定資産

(単位：百万円)

日本	アジア	その他	合計
42,862	3,973	3,677	50,513

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
株式会社エフピコ	13,670	生活分野

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

(単位：百万円)

	生活分野	工業分野	全社・消去	合計
減損損失	90	45	—	136

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項なし。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

該当事項なし。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	生活分野	工業分野	全社・消去	合計
当期償却額	—	10	—	10
当期末残高	—	94	—	94

【関連当事者情報】

重要性が乏しいため記載を省略した。

（1株当たり情報）

	前連結会計年度 （自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）	当連結会計年度 （自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）
1株当たり純資産額	1,243.30円	1,322.14円
1株当たり当期純利益金額	67.33円	73.03円

（注）1. 潜在株式調整後の1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していない。

2. 平成28年10月1日を効力発生日として当社普通株式2株につき1株の割合で株式併合を実施している。前連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額を算定している。

3. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりである。

	前連結会計年度 （平成28年3月31日）	当連結会計年度 （平成29年3月31日）
純資産の部の合計額（百万円）	58,800	61,363
純資産の部の合計額から控除する金額 （百万円）	691	729
（うち非支配株主持分（百万円））	（691）	（729）
普通株式に係る期末の純資産額（百万円）	58,109	60,634
普通株式の発行済株式数（千株）	47,988	46,988
普通株式の自己株式数（千株）	1,249	1,127
1株当たりの純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数（千株）	46,738	45,860

4. 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりである。

	前連結会計年度 （自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）	当連結会計年度 （自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）
1株当たり当期純利益金額		
親会社株主に帰属する当期純利益金額 （百万円）	3,147	3,404
普通株主に帰属しない金額（百万円）	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期 純利益金額（百万円）	3,147	3,404
期中平均株式数（千株）	46,739	46,616

（重要な後発事象）

該当事項なし。

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項なし。

【借入金等明細表】

区分	当期末残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	4,662	5,188	1.4	—
1年以内に返済予定の長期借入金	2,630	4,263	0.7	—
1年以内に返済予定のリース債務	265	295	—	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く）	10,981	8,973	0.6	平成30年～35年
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く）	230	250	—	平成30年～34年
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	18,770	18,970	—	—

(注) 1. 「平均利率」については、借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載している。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載していない。

3. 長期借入金及びリース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりである。

	1年超～2年以内 (百万円)	2年超～3年以内 (百万円)	3年超～4年以内 (百万円)	4年超～5年以内 (百万円)
長期借入金	6,045	2,742	108	47
リース債務	170	55	16	6

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当該連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略している。

(2)【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	23,198	48,724	76,514	102,398
税金等調整前四半期(当期)純利益金額(百万円)	545	1,838	3,669	4,980
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益金額(百万円)	424	1,319	2,484	3,404
1株当たり四半期(当期)純利益金額(円)	9.09	28.23	53.15	73.03

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額(円)	9.09	19.14	24.92	19.86

(注) 平成28年10月1日を効力発生日として当社普通株式2株につき1株の割合で株式併合を実施した。当連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり四半期(当期)純利益金額を算定している。

## 2 【財務諸表等】

### (1) 【財務諸表】

#### ① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	3,121	2,870
受取手形	※1 5,333	※1 3,468
電子記録債権	※1 1,023	※1 1,633
売掛金	※1 19,242	※1 18,273
商品及び製品	3,649	3,483
原材料及び貯蔵品	1,040	1,269
前払費用	30	32
繰延税金資産	310	259
未収入金	※1 3,874	※1 4,076
短期貸付金	※1 6,040	※1 5,563
信託受益権	57	61
その他	60	16
貸倒引当金	△9	△2
流動資産合計	43,774	41,005
固定資産		
有形固定資産		
建物	8,291	9,124
構築物	761	787
機械及び装置	5,055	6,201
車両運搬具	45	85
工具、器具及び備品	434	562
土地	14,718	14,692
リース資産	179	234
建設仮勘定	1,155	653
有形固定資産合計	30,642	32,340
無形固定資産		
特許権	0	0
ソフトウェア	521	498
施設利用権	28	27
その他	1	0
無形固定資産合計	552	526
投資その他の資産		
投資有価証券	12,257	13,471
関係会社株式	12,173	13,528
長期貸付金	※1 2,246	※1 2,497
長期前払費用	36	110
前払年金費用	1,636	2,544
その他	※1 429	※1 292
貸倒引当金	△26	△26
投資その他の資産合計	28,754	32,419
固定資産合計	59,948	65,286
資産合計	103,723	106,292

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
支払手形	469	485
電子記録債務	※1 7,961	※1 8,496
買掛金	※1 11,821	※1 12,400
短期借入金	6,356	8,105
リース債務	123	145
未払金	※1 615	※1 554
未払費用	※1 2,008	※1 1,980
未払法人税等	863	471
未払消費税等	192	—
預り金	※1 3,555	※1 3,006
賞与引当金	524	444
役員賞与引当金	27	19
その他	2	4
流動負債合計	34,521	36,112
固定負債		
長期借入金	10,646	8,507
リース債務	68	105
繰延税金負債	2,640	3,497
再評価に係る繰延税金負債	1,596	1,596
退職給付引当金	2	5
製品補償引当金	549	389
資産除去債務	34	35
その他	98	28
固定負債合計	15,635	14,165
負債合計	50,156	50,278
純資産の部		
株主資本		
資本金	16,533	16,533
資本剰余金		
資本準備金	14,223	14,223
その他資本剰余金	3,037	2,321
資本剰余金合計	17,261	16,544
利益剰余金		
利益準備金	1,370	1,370
その他利益剰余金		
別途積立金	792	792
繰越利益剰余金	10,787	12,678
利益剰余金合計	12,950	14,841
自己株式	△785	△788
株主資本合計	45,959	47,131
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	6,128	7,402
土地再評価差額金	1,479	1,479
評価・換算差額等合計	7,607	8,882
純資産合計	53,566	56,013
負債純資産合計	103,723	106,292



## ②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
売上高	※2 71,629	※2 70,169
売上原価	※2 56,150	※2 54,417
売上総利益	15,479	15,751
販売費及び一般管理費	※1 11,787	※1 11,921
営業利益	3,691	3,829
営業外収益		
受取利息及び受取配当金	※2 518	※2 637
雑収入	※2 369	※2 297
営業外収益合計	888	935
営業外費用		
支払利息	108	113
雑支出	532	312
営業外費用合計	641	426
経常利益	3,939	4,338
特別利益		
投資有価証券売却益	1	117
退職給付信託解約益	448	—
関係会社株式売却益	77	—
その他	—	4
特別利益合計	526	121
特別損失		
支払補償費	—	128
災害による損失	—	50
製品補償引当金繰入額	518	—
貸倒引当金繰入額	2	—
投資有価証券評価損	1	—
その他	—	0
特別損失合計	522	178
税引前当期純利益	3,943	4,281
法人税、住民税及び事業税	1,054	812
法人税等調整額	116	361
法人税等合計	1,170	1,174
当期純利益	2,772	3,107

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本									
	資本金	資本剰余金			利益剰余金				自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計		
						別途積立金	繰越利益剰余金			
当期首残高	16,533	14,223	3,037	17,261	1,370	792	8,996	11,159	△783	44,170
当期変動額										
剰余金の配当							△982	△982		△982
当期純利益							2,772	2,772		2,772
自己株式の取得									△1	△1
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）										
当期変動額合計	-	-	-	-	-	-	1,790	1,790	△1	1,789
当期末残高	16,533	14,223	3,037	17,261	1,370	792	10,787	12,950	△785	45,959

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	6,121	1,384	7,505	51,676
当期変動額				
剰余金の配当				△982
当期純利益				2,772
自己株式の取得				△1
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	6	94	101	101
当期変動額合計	6	94	101	1,890
当期末残高	6,128	1,479	7,607	53,566

当事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本									
	資本金	資本剰余金			利益剰余金				自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計		
						別途積立金	繰越利益剰余金			
当期首残高	16,533	14,223	3,037	17,261	1,370	792	10,787	12,950	△785	45,959
当期変動額										
剰余金の配当							△1,215	△1,215		△1,215
当期純利益							3,107	3,107		3,107
自己株式の取得									△719	△719
自己株式の消却			△716	△716					716	－
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）										
当期変動額合計	－	－	△716	△716	－	－	1,891	1,891	△2	1,172
当期末残高	16,533	14,223	2,321	16,544	1,370	792	12,678	14,841	△788	47,131

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	6,128	1,479	7,607	53,566
当期変動額				
剰余金の配当				△1,215
当期純利益				3,107
自己株式の取得				△719
自己株式の消却				－
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	1,274	－	1,274	1,274
当期変動額合計	1,274	－	1,274	2,446
当期末残高	7,402	1,479	8,882	56,013

## 【注記事項】

### (重要な会計方針)

#### 1. 資産の評価基準及び評価方法

##### (1) 有価証券

子会社及び関連会社株式

移動平均法による原価法

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの

移動平均法による原価法

##### (2) たな卸資産

移動平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下による簿価切下げの方法により算定）

#### 2. 固定資産の減価償却の方法

##### (1) 有形固定資産（リース資産を除く）

定額法

##### (2) 無形固定資産（リース資産を除く）

ソフトウェア（自社利用）

社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法

その他

定額法

##### (3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法

#### 3. 引当金の計上基準

##### (1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上している。

##### (2) 賞与引当金

従業員に支給する賞与に充てるため、当事業年度に対応する支給見込額を計上している。

##### (3) 役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えて、当事業年度における支給見込額に基づき計上している。

##### (4) 製品補償引当金

製品の品質に関する補償費用の支出に備えるため、今後必要と見込まれる金額を計上している。

##### (5) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上している。

###### ①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定に当たり、退職給付見込額を当期までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっている。

###### ②数理計算上の差異の処理方法

数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（5年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌事業年度から費用処理している。

#### 4. 重要なヘッジ会計の方法

##### (1) ヘッジ会計の方法

金利通貨スワップについては、要件を満たしているため一体処理（特例処理・振当処理）を、為替予約については振当処理を採用している。

##### (2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段

金利通貨スワップ

為替予約

ヘッジ対象

外貨建長期借入金

外貨建未収入金

##### (3) ヘッジ方針

内部管理規則で定めるリスク管理方法に基づき、金利変動リスク及び為替変動リスクをヘッジしている。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

一体処理を採用している金利通貨スワップ及び振当処理を採用している為替予約については、有効性の評価を省略している。

5. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表における会計処理の方法と異なっている。

(2) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は税抜方式によっている。

(3) 連結納税制度の適用

連結納税制度を適用している。

(会計方針の変更)

(会計上の見積りの変更と区別することが困難な会計方針の変更)

従来、当社は、建物（建物付属設備を除く）については主として定額法、その他の有形固定資産（リース資産を除く）については主として定率法を採用していたが、当事業年度より定額法に変更している。

平成28年4月に公表した中期経営計画「Make Innovations 60」は、グローバルでの生産体制を構築・増強する方針である。国内の既存設備に関しては、維持・更新を中心とした設備投資計画を策定している。当該設備投資計画の策定を契機に、あるべき減価償却方法について検討を進めた。

国内の主力製品であるエスレンビーズ・エスレンシート等においては、将来の需要は安定的に推移することが見込まれていることから、今後は既存設備の維持・更新投資を中心に実施する予定である。

以上により、当社の有形固定資産の安定稼働が見込まれることから、定額法に変更することが会社の経済的実態をより適切に反映させることができると判断した。

この変更により、従来の方法に比べて当事業年度の営業利益、経常利益、税引前当期純利益は、それぞれ446百万円増加している。

(表示方法の変更)

(貸借対照表)

前事業年度において、「流動資産」の「受取手形」に含めていた「電子記録債権」は、金額的重要性が増したため、当事業年度より独立掲記することとした。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組み替えを行っている。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「受取手形」に表示していた6,356百万円は、「受取手形」5,333百万円、「電子記録債権」1,023百万円として組み替えている。

前事業年度において、独立掲記していた「無形資産」の「リース資産」は重要性が乏しくなったため、当事業年度より「その他」に含めて表示することとした。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組み替えを行っている。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「無形固定資産」の「リース資産」に表示していた0百万円、「その他」0百万円は、「その他」1百万円として組み替えている。

(貸借対照表関係)

※1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
短期金銭債権	17,072百万円	16,480百万円
長期金銭債権	2,267	2,517
短期金銭債務	9,475	9,346

2 保証債務

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
関係会社の仕入債務に対する保証	131百万円	85百万円
関係会社の金融機関からの借入債務に対する保証	812	779

## (損益計算書関係)

※1 販売費及び一般管理費のうち主要なものは次のとおりである。なお、販売費及び一般管理費のうち販売費の割合は前事業年度は約26%、当事業年度は約27%である。

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
保管・運送費	2,238百万円	2,393百万円
貸倒引当金繰入額	△0	2
給与手当・賞与	2,969	2,817
賞与引当金繰入額	445	362
役員賞与引当金繰入額	27	19
退職給付費用	△657	△499
減価償却費	742	673
研究開発費	1,836	1,886

## ※2 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	16,559百万円	16,726百万円
仕入高	48,942	46,933
営業取引以外の取引による取引高		
受取利息	98	131
受取配当金	241	273
受取技術料	226	156

## (有価証券関係)

前事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式(貸借対照表計上額 子会社株式 10,469百万円、関連会社株式 318百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載していない。

当事業年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式(貸借対照表計上額 子会社株式 11,311百万円、関連会社株式 318百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載していない。

## (税効果会計関係)

## 1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
繰延税金資産		
関係会社株式評価損	470百万円	436百万円
製品補償引当金	166	118
賞与引当金	150	126
投資有価証券評価損	64	34
その他	259	252
繰延税金資産小計	1,112	968
評価性引当額	△663	△569
繰延税金資産合計	449	399
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△2,641	△3,187
退職給付引当金	—	△322
退職給付信託設定益	△137	△126
繰延税金負債合計	△2,778	△3,637
繰延税金資産の純額	△2,329	△3,237

\*上記の他、土地の再評価に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として、以下のとおり計上している。

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
再評価に係る繰延税金負債	1,596百万円	1,596百万円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
法定実効税率	33.0%	30.8%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	3.7	1.8
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△1.9	△2.2
住民税均等割	0.4	0.4
投資有価証券評価損	△7.1	△0.7
関係会社株式評価損	0.9	△0.8
試験研究費控除	△1.0	△0.8
その他	1.7	△1.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	29.7	27.4

(重要な後発事象)

該当事項無し。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	8,291	1,386	8	545	9,124	16,659
	構築物	761	76	1	48	787	3,618
	機械装置	5,055	2,025	23	857	6,201	42,764
	車輛運搬具	45	53	0	13	85	483
	工具、器具及び備品	434	275	3	143	562	5,776
	土地	14,718 [3,075]	0	27 [-]	-	14,692 [3,075]	-
	リース資産	179	215	11	149	234	236
	建設仮勘定	1,155	3,541	4,043	-	653	-
	有形固定資産計	30,642	7,576	4,118	1,759	32,340	69,538
無形固定資産	特許権	0	0	-	0	0	5
	ソフトウェア	521	181	2	201	498	661
	施設利用権	28	-	-	1	27	10
	リース資産	0	-	-	0	-	-
	その他	0	-	-	0	0	0
	無形固定資産計	552	182	2	204	526	678

(注) 1. 「当期首残高」、「当期減少額」及び「当期末残高」欄の[ ]内は、土地の再評価に関する法律（平成10年3月31日公布法律第34号）により行った土地の再評価実施前の帳簿価額との差額である。

2. 当期増減額の内、主なものは、次の通りである。

建設仮勘定	減少額	主として本勘定への振替額である。
建物	増加額	関東事業所 第9倉庫新設 920百万円
構築物	増加額	関東事業所 第9倉庫新設 25百万円
機械装置	増加額	関東事業所 第9倉庫新設 38百万円

## 【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高
貸倒引当金	35	3	9	29
賞与引当金	524	444	524	444
役員賞与引当金	27	19	27	19
製品補償引当金	549	—	160	389

## (2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略している。

## (3) 【その他】

該当事項なし。



## 第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・売渡し 取扱場所	(特別口座) 大阪市中央区伏見町三丁目6番3号 三菱UFJ信託銀行株式会社大阪証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	_____
買取・売渡手数料	無料
公告掲載方法	当会社の公告方法は、電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 電子公告のURL <a href="http://www.sekisuiplastics.co.jp/koukoku/">http://www.sekisuiplastics.co.jp/koukoku/</a>
株主に対する特典	該当事項なし。

- (注) 1. 平成28年5月19日開催の取締役会決議により、効力発生日(平成28年10月1日)をもって、1単元の株式数を1,000株から100株に変更している。
2. 当社定款において、単元未満株式について、次の権利以外の権利を行使することができない旨を定めている。
- ①会社法第189条第2項各号に掲げる権利。
  - ②会社法第166条第1項の規定による請求をする権利。
  - ③株主の有する株式数に応じて募集株式の割当ておよび募集新株予約権の割当てを受ける権利。
  - ④単元未満株式の買増しを請求する権利。

## 第7【提出会社の参考情報】

### 1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はない。

### 2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出している。

- (1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書  
事業年度(第72期)(自平成27年4月1日至平成28年3月31日) 平成28年6月27日関東財務局長に提出
- (2) 内部統制報告書及びその添付書類 平成28年6月27日関東財務局長に提出
- (3) 四半期報告書及び確認書  
(第73期第1四半期)(自平成28年4月1日至平成28年6月30日) 平成28年8月10日関東財務局長に提出  
(第73期第2四半期)(自平成28年7月1日至平成28年9月30日) 平成28年11月11日関東財務局長に提出  
(第73期第3四半期)(自平成28年10月1日至平成28年12月31日) 平成29年2月10日関東財務局長に提出
- (4) 臨時報告書  
平成28年6月28日関東財務局長に提出  
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)に基づく臨時報告書である。
- (5) 自己株券買付状況報告書  
報告期間(自平成29年2月13日至平成29年2月28日) 平成29年3月3日関東財務局長に提出

## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項なし。

# 独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成29年6月23日

積水化成品工業株式会社

取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 小西 幹男 印

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 松浦 大 印

## <財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている積水化成品工業株式会社の平成28年4月1日から平成29年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

## 連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

## 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

## 監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、積水化成品工業株式会社及び連結子会社の平成29年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

## 強調事項

「会計方針の変更」に記載されているとおり、積水化成品工業株式会社及び一部の子会社は、従来、有形固定資産の減価償却方法について、主として定率法（ただし、平成10年4月1日以降取得した建物（建物付属設備を除く）等については定額法）を採用していたが、当連結会計年度より定額法に変更している。

当該事項は、当監査法人の意見に影響を及ぼすものではない。

#### <内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、積水化成品工業株式会社の平成29年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

#### 内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、積水化成品工業株式会社が平成29年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- 
1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管している。
  2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていない。

積水化成品工業株式会社

取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 小西 幹男 印  
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 松浦 大 印  
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている積水化成品工業株式会社の平成28年4月1日から平成29年3月31日までの第73期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

#### 財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、積水化成品工業株式会社の平成29年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 強調事項

「会計方針の変更」に記載されているとおり、会社は、従来、有形固定資産の減価償却方法について、主として定率法（ただし、平成10年4月1日以降取得した建物（建物付属設備を除く）等については定額法）を採用していたが、当事業年度より定額法に変更している。

当該事項は、当監査法人の意見に影響を及ぼすものではない。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管している。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていない。